

# 我輩は凜太郎である／そしてその母である



文 水城 沙羅&凜太郎  
写真 みずきさら

© 水城 沙羅

## 目次

39 登場犬物「こーな」  
40 我輩の「こーな」

1. 我輩は凧太郎である
2. そしてその母である
3. 凧太郎がやってきた
4. 凧太郎の容貌
5. 「ひとり」と「いびき」
6. オチンチンの長い毛
7. しつけ
8. かあちゃんの「あっ」
9. 毛糸の靴下
10. 噛みグセ
11. 凧太郎首締り事件
12. 凧太郎から爺ちゃんへ
13. 凧太郎実家に帰る
14. 散歩教育
15. ワンと「緒のハイキング
16. マウンティング対策
17. かあちゃんのこと
18. 凧太郎にガールフレンドができた！
19. 保護者模様
20. 桃ちゃんとヨモギ大福
21. 犬と寝る
22. それはあっという間のできごとだった
23. 凧太郎病気になる(1)
24. 凧太郎病気になる(2)
25. ダーか？ダーだ！
26. 凧太郎が泳いだ
27. 大豆とセーターとレインコート
28. 騙され続けて
29. 猿が出た
30. アマガエルのシッコ
31. ハーレムな時間
32. もうすぐみんな満二年
33. あっいっ
34. 母は見た
35. 桃ちゃんと「緒
36. 凧太郎ふるえる
37. 柿食らう二匹
38. 二度目のお正月

## 1. 我輩は凧太郎である

二カ月と少しの我輩。「ひひひ」と笑って  
いるように見えるらしい



我輩は凧太郎である。犬である。ミニチュア  
ユア・ダックス、ロングヘアードのレッド、  
正式名はフラッキーだそうだが、その名で  
呼ばれたことは一度もない。二〇〇三年五月  
二八日京都市生まれ。七月一七日の祇園祭り  
の日に貰われていった。現在二歳と七カ月と  
少々。今は三重県伊賀市(旧青山町)の里山に  
住み、二度目のお正月をつつがなく迎えた。

飼い主で里親のかあちゃんは、出来心でボ  
クを飼い始めたそう。かあちゃんは、五十  
路らしい。少々変わっているかもしれない。  
でも、ボクは他のニンゲンをあまり知らな  
いから変わっているのか、いないのかの判  
断はつかない。でも、時々凶暴になる。凶暴  
なかあちゃんは、めっちゃくちゃ恐ろしい。  
かあちゃんは、ボクの養育のためと自分の  
生活のために週五日、昼から夕方までのパー  
トに出かける。かなり貧乏らしい。時々通帳  
を見て、大きなため息をつき、くらくらくな  
っている。でも一日もしたらもう元気だ。くよ  
くよしているかあちゃんをボクはあまり見  
たことがない。

かあちゃんが仕事に出かけている間、ボク  
は留守番だけど、帰ってきたら一番にボクを

抱いて、「お留守番お利口さん」と言って、エ  
イセイボウ口五個のご褒美をくれる。これ  
はこれで悪くないけど、もっとくれたらいい  
のにと常々思っている。

かあちゃんは、月に一度くらいボクを実家  
に里帰りさせてくれる。そこにはボクと同  
じレッドでロングヘアードのベルパパとタ  
ン&ブラックで同じくロングのティアラマ  
マレッドでロングのマロン姉さんがいる。  
実家のニンゲンのお母さんとお父さんは、  
ボクが帰ると歓迎してくれるから大好き。  
かあちゃんはお父さんのことをなぜか爺ち  
ゃんと呼んでいる。ベルパパのお父さんだ  
から、ボクには爺ちゃんにあたると思っ  
ているようだ。美人のお姉さん二人とお兄さん  
もいる。ボクが行くと、いつも「リントロカ  
わいい」と言って歓迎してくれるので大好  
き。

ボクにはガールフレンドがいる。その名は  
桃ちゃん。桃ちゃんはボクより八日だけお  
姉さんで、大らかでおてんば、ちょっと太目。  
「桃は飼い主に似て、食意地がはっている」と  
桃ちゃんのお母さんが言っていた。ボク  
は桃ちゃんと、桃ちゃんのニンゲンのお母  
さんが大好きだ。お父さんも好きだけど、大  
きな手が少しだけ「コワイ」。大きな手でボク  
を抱いて、ニンゲンの赤ちゃんにするみた  
いに、高い高いをしてくれる。ボクはそれが  
ちょっと「コワイ」。でも、美味しいモノをたく  
さんくれるのは、このお父さんだ。

「ちょっとやろ」と言っただけはいっぱいくれ  
る。ボクは、かあちゃんの「ちょっと」に馴ら  
されている。だから、お父さんの「ちょっと」  
は、ボクには「いっぱいなんだ。かあちゃん  
はそれを見て、「お父さん、そんなにやらな  
いでください」といつも言っている。でも、  
お父さんは、かあちゃんの見ているのには、  
いっぱいいられる。桃ちゃんが太目なのは、  
このお父さんが原因だとボクは密かに思っ

ている。

だって、お父さんの「ちょっと」は、お父さんの「一口くらいなんでもん。カラダだっですごく大きいし。ねっ、すごくたくさんでしょ。ジャーキーだって、ごっついに手に握った分だけくれるんだ。桃ちゃんと二人分だけどね。だから、きつと桃ちゃんはいつもいっぱい貰っているんだ。

「このころ、ボクは桃ちゃんにぶち当たられたらこける。かあちゃんがついこの前、桃ちゃんを片手で抱こうとして、落としていたのをボクは見た。

桃ちゃんは、お正月が終わってから、またちょっとだけ太ったみたいだ。それを気にしてか、かあちゃんが毎回「ちょっとしかやらないでください」と言っていたせいか、お父さんもホントにちょっとしかくれなくなつた。かあちゃんは安心した顔をしているけど、ボクはちょっとつまらない。

桃ちゃんはすこいやきもち焼きなんだ。桃ちゃんのお母さんがボクにやさしくしてくれると体当たりをかましてくる。このころの桃ちゃんとボクは、体重にも差があるみたいで、この体当たりはちょっとつらい。桃ちゃんは、きつとお母さん子だ。それとね、話題がボクのことになったり、ボクだけが、かまわれたりしていると、桃ちゃんは仰向けに寝転がって、両手を揃えておいでおいでみたいにするんだ。そしたらみんな桃ちゃんに注目しちゃう。テレビで見た、ラッコが、胸で貝を割っている姿にもよく似ている。ニンゲンは「桃ちゃんうれし、うれしくてんのか、かわいいなあ」と言う。その姿はホントにもすごくかわいくてね。で、ボクは忘れられてしまうのさ。

でも桃ちゃんのお父さんは、桃ちゃんがボクの前でその格好をしたら「桃、そんな格好したらアカン」って怒って、桃ちゃんをひっくり返してモトに戻しているんだよ。仰向

けに寝ている時、桃ちゃんはオマタもおっぴろげだから、ボクとしてはついニオイを嗅ぎにいったりして舐めてしまう。そついうのがお父さんには気に入らないみたいだ。

桃ちゃんのお母さんが「お父さんは、桃をニンゲンの女の子と「絡みたいにおもてんにゃわ」とかあちゃんに喋っていたよ。

それから、桃ちゃんのお母さんが、ボクにちょっとしかくれないかあちゃんを見て「凜ちゃん、そんなんやったら味がわからへんな、かわいそつに」と言ってくれたことがあった。かあちゃんの返事は「好きなものをちよつとだけ食べていたら、いつまでも好きでいられるし」だって。

ボクはいつだって、美味しいものをいっぱい食べたい。時々桃ちゃんちのワン子になりたいと思う時があるくらいだ。

飼い主を選べないのはボクたちペットの宿命なのかもしれないけれど、どつやっつときあっていくかがポイントなんだ。

ボクはね、時々鼻先と甘え声でかあちゃんを操っているんだよ。そのことにふと気づくかあちゃんは、「あんたのしもべやな」と言う。でも使われても嬉しそうにしている。こ「が」ミソさ。自分で言うのもなんだけど、ボクってアタマいいんだよ。

向かって左が桃ちゃん



## 2. そしてその母である

飼い主で里親、自称ボスのかあちゃんである。私はかつて熱狂的な猫派だった。過去に一匹だけ猫を育てた。その名は大亮<sup>だいすけ</sup>。彼を飼っている最中に呼吸困難になって、救急車で入院。血液中の酸素ゼロ、猫アレルギーによる喘息と診断された。このままでは死ぬと医者に驚かされ、猫の貰い手を探し、泣く泣く愛猫を手放したという過去がある。その時彼に誓ったのだ。「大亮以外の猫はもう絶対飼わへんし。あんたがいつか、どこかで死んだら、私のとこに戻ってきていよ。化け猫になっても一緒に暮らそな」と。

幸い体重五キロの愛猫の貰い手は見つかったが、私は一カ月ほど泣いて暮らした。泣くと喘息の発作が起こった。その時、お医者さんに「猫がアカンいうて、犬飼わんといena。」と念をおされた。これは今から二〇〇年程前のお話。

それが犬を飼うことになるとは夢にも思っていなかった。この世は夢にも思わないことがよくおこる。愛猫への誓いは忘れていないが、猫ではなく犬だからいいだろう、もう舌の根も十分乾いた、と自分に折り合いをつけ、今でも飾ってある大亮の写真に詫びも入れ、熱狂的猫派人間が犬と暮らすことになったのだ。喘息も今ではすっかり陰をひそめ、いつも気管支拡張剤やステロイド吸入剤を持ち歩いていたのがウソのようだ。

爺ちゃんは、私が治療に通っている按摩の先生で、高校の二年先輩。「子犬いらない？」という呼びかけに、なんとなく手をあげてしまった。ほんの勢い、つい出来心。聞けば餌代も月千五百円くらいでいけるといふことだった。それなら貧乏所帯でもなんとかなると思っただのだ。

ところがどっこい、予防注射の高いこと、

フィラリアやダニの予防薬も高い、ペットシートもある。やれサークルだ、やれ犬用のオモチャだ、お菓子だと、飼い始めてあまりのかわいさに、いつものごとく後先を深く考えず、財布のヒモはゆるゆる、鼻の下は伸び伸び、気がつけば、でれんでれんのかあちゃんになっていた。

顔もテカイがボールもテカイ



### 3. 凧太郎がやってきた

凧太郎と名付けしワンがやってきたのは彼が一カ月と二〇日、二カ月に満たない小さな小さな時。京都まで迎えに行ったその日は祇園祭の七月二十七日、ありがたいことに梅雨の晴れ間で、見事な晴天だった。

初めて対面した凧太郎の母ティアラは男らしく見え、父ベルは美人に見えた。そして、凧太郎が私を見る目は「うたぐりの眼」だった。黒い大きな目のふちから白目が少しのぞいたジト目。

『こいつかよ。僕を引き取るのは。大丈夫かなー。心配だなー』。そんなモノ言う目。私もワン子育ては初めてなので、自分が心配だった。『凧太郎キミの心配は当たっている』と心でつぶやく。

私はボスとしての最初の仕事、青山まで連れ帰る方法を、事前にあれこれ考えた。まだとても小さいから、ダンボール箱のふたを立てた状態で四隅を貼り合わせ、そこにワンを入れ、箱にシートベルトをかければ十分だろうと結論した。

現実には、わずか数十秒でワンが箱をよじ登り、這い出し、しかも落ちるといふことになった。なんとワンが箱をよじ登ったのだ。犬もネコのようによじ登れるということ、驚きを持って知ることになった。この時、ワンの爪が尖っていたからこつということができた、ということの後で知ることになるのだが。このままではワンも運動する私も危ない。

車を止めて思案。車の中には手作りの移動ゲージも積んでいた。ちゃんとしたゲージを何千円も出して買う、という思いきりがつかず、早い話がケチなだけかもしれないが、失業中の身には何千円は痛いのだ。それで百円ショップにあるバーベキュー用の網を結束テープで止め、苦心してゲージを作った。

しかし、このゲージにワンを直接入れるのは作った本人がなぜか不安。そこでダンボール箱ごとゲージに移すことにした。すると予想もしていないことがあった。

泣き叫びが凄い。

『このバカタレ、なにすんねん、親元返せどこ連れて行くねん、扱いちゃんとせい、こないなとこ入れるな！』

罵詈雑言の数々を言っている。そう聞こえた。これが耳をつんざく悲鳴のように凄まじい。こらたまらん。数十メートル進んだだけで車を止めた。今度は箱から出して、不安の残るゲージに直接入れてみたが、泣き叫びはやまない。

その小さなカラダからは想像できないほどの大きな声に感嘆。同時に、穴があったら入りたくなるような、動物虐待をしているようなそんな気分陥ってしまうほどの泣き叫び。非難がましい悲鳴のような泣き叫びが、車外にまで聞こえているのではないかと、思わず周囲を見渡し、あたりをばかっただ。

とまどっていてもしょうがない。車をスタートさせ一路青山へ。だんだんと大人しくなっていたが、四肢を踏ん張り、初めての車に耐えている。ボスの車は軽貨物なのでクッションが悪い。座席の下がエンジンなのだ。

ワンに気をとられると運転が粗末になる。運転が粗末だと彼は鼻を鳴らす。わかっているのだろうか？。鼻を鳴らされると、目は助手席に向く。すると、つい運転が。これではいけないと思い、大きく深呼吸。私が落ち着くと凧太郎も落ち着いたようだ。

一刻も早く帰ってやった方がいいと貧乏ボスは経費を奮発。京都東から瀬田まで名神に



乗る。高速道路では運転も安定し、車の揺れも少ない。凧太郎はスピードを恐がっている様子はない。

滋賀県の信楽まで来ると風も涼しい。くねくねと曲がる大戸川<sup>だいで</sup>沿いでも車酔いのような素振りはない。アクビはするが、決して寝ようとはしない。足が短いので、立っているのか座っているのか、運転席から見ると判別しづらかったが、前足は踏ん張っているのはわかった。

緊張しているのだろうか。あるいは『そんなもん寝られるかい。あんた信用してええもんか悪いもんか。まだわかるかい』という心境かもしれない。そして二時間余り。八〇キロのドライブを終え、彼の新しい棲み家となる里山のボロ古民家に到着。

ひとりといっぴきは、二者二様にぐったりだが、新生活はこれからだ。さてさて、新前ボスの子育ては？ ワンの行く末は？

#### 4. 凧太郎の容貌

爺ちゃんに「子犬いらない？」と聞かれ、ワンの飼い主になることを決心して数日後、生家に行って初対面をした。その時の凧太郎は生後一カ月くらいで、揃えた両手に乗る大きさ、顔も耳も、どこもダックスらしくない子犬だ。そしてほとんど黒い毛に覆われ、凧とした涼しくもキリっとした目をしていて。その時の対面で、名を「凧太郎」と決めたのだった。

生まれながらに、ダックス顔をしていると思っていた私は、この顔がほんとに長く伸びるのか、この耳がほんとに長くなるのだろうかと信じられない気持ちだった。

初めて会う母さんワンは男らしく見えてしまった。そのしっかりした足は、まるで地球を抱え込む様に少々がに股で、しっかりと立ち、番犬としての役目を果たすかのように吠え続けていた。産後の神経質ゆえかもしれない。お父さんワンは美人顔。全体的には茶系の毛並みで黒っぽいこげ茶が入っている。足はスラッと短い。そして人懐こい。初対面の私にお腹を見せてくれた。お姉さんは耳の毛がソバージュみたいに美しく、薄いクリーム色がかかった茶色の毛並み。お姉さんワンも、お父さんにならってお腹を見せてくれた。

「緒に暮らし始めた凧太郎をしげしげと見ていたら、どうも体型はお母さん似だ。早い話が、足が〇脚でがに股、体型は逆三角形型。水泳選手みたいに上半身がしっかりしている。毛色はお母さんとお父さんのミックスのようだ。顔がなんといつか、一言では語れないので詳しく書こう。」

まず、額が富士額といつか鉄腕アトムといつかミッキーマウスといつか、毛色の変わるところが、絵に描いたような美しいハートの上部を思わせる。

目の上には人間の眉毛のように濃い茶色の毛が一筋、目頭と目の真下には黒に近い毛、目尻には濃い茶色の毛が少し、それらの濃い毛の縁に、グミテーションのように一段階薄い色の毛が生えている。これらの毛が、目を縁取り、まるで歌舞伎役者の隈取りみたいになっている。

鼻の上には、噛みシワに見えるような二筋の濃い茶色の毛、口元から顎にはヒゲのように黒い毛。このため、仰向けに寝ていたら、口元が閉じているのに「ひひひ」と笑っているように見える。

目の周りが歌舞伎役者の隈取りみたいなので、寝ていても目が開いているようにも見える。鼻筋の線状の濃い毛のせいで、噛みついていないのに噛みついてる顔に見える。かなりユニークな顔でボスは将来が楽しみだ。

今、歯が生えてきてこそばいのか、何にでも噛みたい盛り。この顔で、おまけに白目を見せて噛みついてる姿は、幼いながらもなかなかの形相。ちょっと怖かったりする。

しかし、かわいい。噛みついてる時の顔は悪魔にさえ見えるが、仰向けに寝て、耳が床に広がると、そのかわいさは何とも言えない。ぬいぐるみよりも、もっともったかわいい。見ているだけで私の顔に笑みが広がる。

同じく仰向けに寝たままで、その短い両手をひょいと曲げて寝ている姿（人間がお化けを表す手の格好）も、かわいくてユーモラスだ。初めてその姿を目にした私は、思わず声をひそめて笑っていた。なぜ声をひそめたかというと、彼が寝ていたからである。



お化けの手



## 5 「ハウ」が「びき」

「ひとり」は、初めての子犬同伴のドライブで緊張疲れ。親元から引き離された小さな「いびき」は引越し疲れ。

「ひとり」は事前に「ミニチュアアダックスの飼い方」という本を二冊も買い、読み、少しばかりは勉強していた。本には、子犬を連れ帰ったら、すぐさまペットシーツを敷いたサークルか、ゲージに入れること、と書いてあった。移動中はオシッコを我慢するので、オシッコをする場所に導くことが大事らしい。

早速サークルに入れられた「いびき」は水も飲まず、車に乗るために昼抜きだったのに、実家から貰ってきた幼犬用ドッグフードのワンコ飯も食べない。疲れと緊張によるものか、新前のボスは、水も飲まないのが心配。

一カ月と二〇日のワンは、サークルの外に出しても、足取りがふにゃふにゃとしている。実家で見ただようには動かない。ヨタヨタと歩く姿は、高齢犬のごとくだ。動く範囲もごく狭い。最も二カ月に満たないワンは、みなそんなものかもしれない。ワン子育ての経験がないので、あれやこれやと何でも心配、胸中不安。ワンも心配そうな疑りぶかい目でこちらをみている。あまり鳴きもしない。夜になり、だいぶ遅い時間になってからやっとご飯を食べてくれた。ボスは「安心。実家の人間のお母さんからは、」今晚は鳴くかもしれないと伝えられていたが、第一夜は夜鳴きをしなかった。

ボスは、鳴かないええワン子なんやと安心して、子持ちになった祝い焼酎を飲み、酔っ払って幸せに眠った。でも、それは、単に子犬が疲れきっていたからだけだったということこそ翌日知る事になる。

翌日もご飯はあまり食べないが、新前のボスとワンは、大過なく平和に一日を過ごした。二人して日向ぼっこなどをし、それなりに幸せな時間が過ぎた、とボスは思っていた。

そしてそれは、真夜中に始まった。

午前一時、凜太郎に「おやすみ」を言った瞬間から、鳴き始めた。『昼間、ちいとも鳴かないで、なんで今ごろから鳴くねん』と、ボスは胸中不快。幸せな時間ではあったが、ワン子に気を使い、それなりに疲れていたのだ。

そのうち鳴き止むだろうと思っていたのだが、敵もさるものなかなかのもの。小さくてもツワモノである。すでに一時間半の間、鳴き続けている。寝られたものではない。ワンワンと鳴くのでなく、実に切ない哀調で鳴くのである。

爺ちゃんから「せつない声に耐えられるかどうか、知らん顔できるかどうかが今後のポイント」というアドバイスももらっていた。ボスはアドバイスを守って、ただじっとベッドの中で鳴き声を聞いていた。

闇夜に響き渡る、高音域のせつなくも哀しい鳴き声。ワンワンではなく、キューンキューン キュウんキュウん クーンクーンを取り混ぜて鳴いている。

聞くものをただただ罪悪感に落とし入れるような声。寝、ら、れ、ん。

この日の鳴き声の趣旨は多分こんなだろう。

『さびしいよー』『ここから出せー』『おかさーん、おとっさーん』『一人はいやだー』

延々一時間半、何とも言えないせつない声を聞きつづけたボスは、夜中の二時半について観念。凜太郎のもとに行き、彼をじっと見る。

サークルの中で、カラダ全体を震わせ、声を絞り出している。目は何かを訴えている

ように見える。

抱いてやらずのはおれない。やさしく、やさしく、抱いた。抱き始めてからも、カラダを震わせてクンクン、キュンキュンと鳴く。しばらくそうしていたら静かになった。ボスは安心した。

「凜太郎 おやすみ」と言ってサークルに入れ、寢床に立ち去ろうとしたその瞬間から、またまた切ない、切ない、切ない鳴き声が始まり、限りなく後ろ髪が引かれる。

心を鬼にして、しかし、大層眠いボスは、少々腹もたてながら、実に複雑な心境ではあったが、今度こそ知らん顔を決めこもつと断固たる決意をして寢床に入った。

時計を見ると午前三時、まだ鳴いている。が、やがて鳴き疲れたのかあきらめたのか、ボスが疲れて寝入ってしまった、聞こえなくなっただけは定かではない。やがて睡眠不足の夜はあけた。

早くもボスは腰砕けぎみである。こんな毎晩続いたらどうしよう。ちゃんと育てられるやろか。育児ノイローゼにならんやろか、と。

## 6. オチンチンの長い毛

八月のある日、熱気に満ちた車に乗った瞬間に、自分のカラダからもわーっと、クサイニオイが漂い立った。ふと見ると、Tシャツに身に覚えのないシミがある。なんでだろう。そう思いつつ失業中の私は、職安に急いで出かけた。この日は指定日。指定時間間に合うように行かねばならない。

職安の長椅子に座ったら、隣に座っていた女性が席を立ち、あっちの席に移動した。あ、りゃあ、ニオイのせいだろうか。そんなにクサイのだろうか。

家に帰り、子犬のシッコ風景を何気なく眺めていたら、ペットシートにオチンチンが接着。えっ、こんなに小さいのに、あんなに大きなオチンチン？　えーっ！

好奇心は即満たす。シッコを終わった凜太郎を抱き上げて観察。見ると、オチンチンを包んでいる毛がびよーんと長い。まるで書道で使う毛筆の穂先のようになっていた。その毛がシッコをたっぷり含んでいる。

シッコがペットシートに上手にできたら、すぐに誉めてやるのが大事と聞いていた。シッコをしてすぐに誉めなくては、何を誉められているかわからないのだそう。従順なボスは聞いた通り、シッコをするなり、シッコたっぷりつきの凜を抱いては、「よし」と誉めていた。Tシャツのシミはきつとシッコだ。となると、私はシッコ臭かったんだ！。ありゃあ。と今更ながらに赤面。

オチンチンの毛は、とにかくビヨヨンと長い。後ろ足を軽く曲げ、腰を少しおろし、その穂先をシートに触れさせて用をたしている。用が終わったら、足の毛にもオチンチンの穂先の毛が触ってシッコまみれ。その足で耳をかく。耳の毛が汗をかいたみたいに濡れているのはなんでだろう、とずっと

## 7. しつけ

気にかかっていたのだが。これでわかった。みんなシッコだったのだ。そうとは知らず、ボスは凜のアタマや耳に頬擦り頬擦り。

床のあちこちにも濡れシミがあつて、なんでやろーと思っていたが、これも原因がわかった。みんなシッコだったのだ。シッコをしたあと、自分のオチンチンを舐める。穂先から落ちた雫で濡れた床も舐める。その口でボスの口も舐めにくる。真実がわかってしまったらちよつとたまらないが、即あきらめの心境。全てすんでしまったこと。

最近では汚いもキレイもぶつとんでしまった。人間の赤ちゃんのウンコやシッコが汚くないなら、子犬のシッコもウンコもそう汚くはないだろう。

このオチンチンの長い毛、切るもんではないのだろうなあ。と、思いながらも、爺ちゃんに聞いてみた。すると散髪するということとだった。実家のパパワンのベルは、ペットショップで切ってもらっているそうだ。

オチンチンの毛の散髪って、なんか聞いただけで笑えてしまう。「一体あの長い毛は、なんのために生えているのだろうか。」

そういうことは「ミニチュア・ダックスの飼い方」の本には載っていない。二冊の本のどちらにも載っていない。そういうことこそ載せておいて欲しいなあ、と思いがながら、じつとしていない子犬のオチンチンを過って傷つけないように、そして、できるだけ筆のようになるようにと、苦戦しながらカットした。

オチンチンの毛先は筆のようでなければ、成犬が片足を上げてシッコをする時、シッコが飛び散るそうだ。将来に不安がないでもないボスである。

睡眠不足の夜が明けた日、また今夜も夜鳴きをするのだろうか、と、ボスは戦々恐々だった。その日の夜、ボスは凜太郎に言った。

「お願いやし、明日起きてくるまで静かにしててや」と。

ボスは寝起きが非常に悪い。目覚し時計で起こされるのさえ気に入らない種類の人種だ。が、心配の期待は裏切られ、ありがたいことに夜鳴きはなかった。ただの一度も。そして朝、吠えたてて起すこともなかった。なんていいワン子なんだろう。起きてきたボスはワンを誉めまくり。「あんた賢いなあ。」

でも、子犬が同じことを繰り返してくれると期待するのは多分間違っている。覚悟を決めた三日目の夜はあまりにも静かに過ぎ、いささか拍子抜け。その後も鳴く事はなく、結局夜鳴きしたのは一夜だけだった。

しかし、いったんボスが起きたと認識したら、かわいい仕草で飛び跳ね「飯くれー、サークルから出せー」と要求はいろいろ。お願いモードは「クーン、クーン」や「キューン」、その鳴き声と姿は愛しいとさえ思えるのだが、「うーワン、ワン、ワン」とえらそうに吠えて要求されると、ボスはムっとする。すこぶる勝手気ままな自分に気がついてしまった。

ワンは自分の要求がなかなか満たされないと、小さなカラダで大きな声を出し、ボスに向かいえらそうに吠える。けれども来客には一切吠えない。吠えるどころか、少々震えてさえいる。これはちよつと困ったものかもしれない。

とうとうボスは凜に頼んでみた。「誰か来はったら吠えて教えてや」と。これが災いしたのか、その後は、門の外を通る人にでも吠え、吠えたらアカンと言っても聞く耳のないワンになってしまった。

しつつけてつくづく大変だ。足元の小さなワンを踏んではいけないと気を使い、シッコとウンチのしつつけをし、一緒に遊んでやらねばと頑張り、ワン対応にちょっと疲れしてきた。八月も終わりになるころ、ボスは目まいに悩むようになる。首を少し動かすだけで起こる目まい。凜を見ようと下を見たらクラクラ。

そんなこんなで育児疲れもピークに達し、小さいワン子が言うことを聞かないのを当たり前前とも思えず、心の狭いボスがついにキレてしまつて日がやってきました。

ワンワンと鳴き続けるワン子に体罰を食らわした激しい衝動にかられた。けれどもそれは踏みとどまり、手近にあるモノをつかみ、思いっきり床にぶち投げた。それでも気が済まず、箒でサークルを叩いた。凜は怯えていた。そしてキレた私は叫んだ。凜は両手を見せ「この手はあんたを叩くためにあるのとちゃう。あんたを撫でたり、抱いたりするためにあるんや！ わかったか！」

床には傷あとが残り、子犬にあたった後悔が残り、目まいはますます激しくなった。いいことは一つもない。

凜の爺ちゃんは、腕のいい按摩の先生なので診てもらった。小さなワンを見下ろしすぎて首を凝らしたということだった。小石みたいな凝りが点在していたそうだ。凝りでも目まいがおこるということを知った。凝りをほぐしてもらったら随分とマシになり、サークルを少し高い所に置いたらどうかとアドバイスを貰った。

家に帰り、早速サークルの位置を高くすることにした。シーズンオフの炬燵の上にサークルを置いた。そして、ワンがサークルへ出入りするための階段用の台も置き、その台を昇り降りできるように教える。また「騒動。幸い、階段昇りはすぐに覚えてくれた。降りるのは少しは怖がったが、すぐに慣れたよ

うだ。これで少しは「見下ろす」のがマシになった。

シッコのしつけどが、ちゃんとペットシーツの上でしたかと思えば、次は床の上でする。ウンチはそれこそ目を離したら、いろんなところでする。ふっ。ため息が出る。じっと見ていたら、ちゃんとシートの上でするから、ひよっとしたらずる賢いのかも、と子犬相手に思ったりもする。

ある時、現行犯でシッコ現場を発見。本には現行犯は怒らないといけないと書いてあり、叱り方は、週刊誌やスリッパで床を叩いて大きな音を出すであった。たまたま手元に週刊誌もスリッパもなかったので、手で床を叩いた。それも思いっきり。肩がジーン。つくづく自分がバカだと思ったけれど、後悔先に立たず。手と腕と肩がしっっかり痛い。怒ったら痛いやり、疲れるやり。

次はウンチの現行犯現場。ボスがトイレで大きい用を足して出てきたら、ワン子もしていた。思わず「あ」と声が出たが、親子で「一緒、なんて一瞬間が緩み、一人笑いの声ももれてしまったけれど、ここはしっかりと怒らなくてはいけない。

背中を弓なりにし、腰を少しあげて（脚が短いので上げているのか、下げているのか、わかりづらい）、すでにモノを出し始め、動きのとれないワン子は目だけボスに向けた。愛らしい黒目に白目ものぞかせ、上目使い。その目は、「しもた 見つかってしもた」と言っているように見えた。

ボスは凜が用を足し終わるのを見定め、叱るためにひょいと片手で持ち上げた。スリッパを脱いで床を叩くという方法もあったのだが、それでも手が痛いのは経験済み。ええいままよと、本には決してしてはいけないと書いてある体罰を初めて食らわす。小さなアタマをぺしっ。アホにならへんかと心

配しながらもベシッ。鳴くほど叩いた。心が疼いた。疼く心で、次叩かなアカン時があったらお尻にしよ、と思っていた。

心を疼かしてから思い出した。爺ちゃんはこう言っていた。

「ワンは人間が叱ることに關しては、非常に学習能力に優れ、次に自分がイヤなことをされたら、激しく叱られた方法で復讐する。ウンコ、シッコで怒られたら、ウンコ、シッコで復讐するから、あまり叱らない方がいい」と。ボスは学習能力に欠けている。とほほ。

## 8. かあちゃんの「あっ」

ボクのトラウマを告白する。それは、かあちゃんの「あっ」。

かあちゃんがボクを見て「あっ」と言うと、ボクは反射的にワルイコトをしたに違いないと思ってしまう。最初の「あっ」が今でも尾をひいているのだ。それはボクがまだ満三カ月にもならないころのことだ。

そのころ、かあちゃんは、一生懸命ボクにシッコとウンコのしつけをしていた。シーツの上ですると、猫なで声でもものすごく誉めてくれた。「凜太郎 おりこつやな 賢いなあ」って。

ボクはそのころ、まだお利口も賢いも意味がわかっていなかった。床の上でシッコをすると、かあちゃんはスリッパで床を叩いて大きな音をたててから怒る。ボクはなぜ怒られるのかわからなかった。ボクが叩かれるわけではないし、大きな音にはビクっとするけど、それだけのこと。それも、かあちゃんの見ているところでシッコをした時だけのこと。

かあちゃんの目につかないとこでの粗相はセーフ。かあちゃんは現行犯でしか怒らない。爺ちゃんに現行犯でしか怒ってはいけないと教えられていたからだ。でも、時々その教えを忘れて怒る時もあった。

ある日、かあちゃんがトイレに入った。おっ、ウンチのニオイ。ボクはニオイには敏感だ。そのニオイのせいかな、ボクももよおした。それで、かあちゃんが見ていないことを幸いに床の上で始めた。そこにかあちゃんが出てきた。

かあちゃんは、ボクを見て「あっ」と叫んだ。声のする方を見た時、かあちゃんの目とボクの目がしっかりあってしまった。ボクはどうしようもなかった。今まきに出ようとしているものを止める術がない。かあちゃんはそんなボクの前に座り、じっとボクを

凝視した。

そして、全部出てしまっのを待ってから、いきなりボクをひよいと抱き上げ、ボクのアタマを思いっきり叩いたのだ。

その前の日かどうかは覚えていないけれど、ボクのシツ「現場では床を掌で叩いた。大きな音を出せるものが手元になかったのだ。かあちゃんは、後先を考えないおバカをこそとばかりに発揮し、手加減しないで思いっきり自分の手を床に打ちつけたものだから、ものすごく痛かったみたいだ。腕に電気が走るほど痛かったらしい。

その痛かったのをボクにあたることにしたのかどうかは定かでないが、今回はついに体罰になった。

ボクは「キヤウイン」と鳴いたが、かあちゃんはボクを放さない。2、3回叩かれたように思う。叩きながらかあちゃんが怒鳴った。

「こんなとこでしたらアカンやろ。ウンチもシートの上でせんとアカン」。こんなにコワイかあちゃんは初めてだった。体罰も初めてだった。

この事件を境に、かあちゃんの「あっ」はボクにとって恐怖となり、身が縮む。トラウマだ。今では恐怖は薄れたものの「あっ」を聞くたびに「ボク、ワルイコトしたのかな？」と反射的に思ってしまうので、とりあえずは「ごめんさい」のポーズをすることになっている。

ボクのごめんさいポーズは、カラダを横にして、お腹を出して、片手を軽く上げ、耳はしよぼん。実はこたけの話なのだが、最近ではボクにも生活の知恵がついて、触らぬ神に祟り無し、負けるが勝ちということもわかってきたのだ。先に謝ってしまうと、かあちゃんの怒りも薄れる。ボクはこのポーズは、かあちゃんにはイジケ犬に見えるらしい。

ボクはたまに「あっ」が聞こえていないのに、かあちゃんの姿を見ただけで「ごめんさい

さいポーズをしてしまう時がある。すると、かあちゃんは「何いじけたポーズしてんの？何かワルイコトしたんか？」と聞いてくる。

こういう場合は、ワルイコトをしたような気になっている時の、ボクの反射的行動なんだ。けど、今のところは、たいがいお咎めなしとなっている。でも、時々そのポーズを見ながら、かあちゃんの「あっ」を聞かなくてはならない羽目にもなり、その後「こらっ凜太郎」とかあちゃんの「コトバ」が続ぎ、時々ペシッも飛んでくる。こういうのはニンゲン界ではヤブヘビとか、自業自得とか言っそうだ。

ちなみに、かあちゃんは独り言でも「あっ」と言っ時がよくある。要するに自分の失敗も、ボクの失敗も「あっ」。かあちゃん自身の「あっ」は、大抵は台所から聞こえる。この「あっ」は食材を落とした時に発せられることが多い。たまに指を切ったりしての「あっ」もある。そっいつ時はその後「痛っ」がつく。かあちゃんが台所にいて「あっ」と言っのを聞いたら、台所に美味しいことがあるという知恵もついた。ボクは最初のころ、かあちゃんが台所に立つと、あてもないまま台所のキッチンマットの上で座っていたのだけど、そんなことをしなくても、ちゃんとお知らせ放送の「あっ」が聞こえてから行った方がいいということがわかったのだ。ボクはお利口になっているのさ。



## 9. 毛糸の靴下

凧太郎はヨタヨタと歩く。高齢犬みたいな歩き方。カラダの左右が上下動する。引越し当日は疲れていたせいもあったのだろう。行動範囲はごくわずかだった。そして歩きにくそうだった。翌日、少し庭に出した。一人と一匹で日向ぼっこ。めっちゃくちゃのかだー。

おっかなびっくりで、庭を少しだけ歩く凧。あれ？ちゃんと歩いている。その時突然、本の二行を思い出した。

「肉球の間の毛もカットしてやる」「わははは」と笑い出してしまった。肉球の間から毛がはみ出し、肉球全てを覆いつくしているように見えた。まるで毛糸の靴下だ。これでは滑るだろう。歩き方が変なのはこのせいだったのか。

我が家の台所兼居間は、ボスでさえ滑るフロアリング。その床で、毛糸の靴下を履いたままの凧太郎は、初めてのアイススケートで、思うにまかせず足が勝手に滑ってしまった。人みたいなものに違いない。滑る、滑る、止まりたくても止まらない。

歩くだけで滑る。きつと本人にはどうしようもない結果だろうが、四肢を前後にフニヤーと伸ばしきって滑ってしまう。なんとも笑える。足が短いのも、かわいらしさを倍増する。まるで動くぬいぐるみ。

あまりに滑るせいか、四本足で歩かず、お尻を床につけたまま前足二本だけを使い前進、お尻は滑らせるという歩行もあみ出していた。

これでは歩きづらだろうと、手近にあった眉カット鋏で、はみ出た毛を切つてやろうとしたが、うまく切れない。翌日には犬用のカット鋏を購入。手を噛まれながら、なんとか肉球が出るようにカット。これで、大分

歩きやすくなったようだ。行動範囲も広がった。

とはいえ、まだ足腰がしっかりしていないのと、カットの仕方がイマイチだったのか、ヨタヨタと歩いていた。そのヨタヨタ足で、必ずキッチンマットに乗りに来る。キッチンマットを噛んで引っぱ張っていたかと思うと、とつとつ一本噛みきって、その端をひっぱる。

おー。キッチンマットがほどけていく、とびっくり。何事につけ、新しい出来事すぐに感心してしまうのだが、感心している場合ではない。困ったヤツぢや。

その後も、凧太郎のキッチンマット巡回は、サークルから出してやるたびに行われた。マットをほどかれたらたまらないので、台所仕事終了後に片付けるようになったが、マットがなくても巡回は行われる。

マットをほどいて遊ぶだけが目的ではなかったようだ。調理でこぼした野菜屑とか、とにかく落ちているものは何でも口に入りたい。落ちているもの探しも目的だったようだ。又カ味噌をこぼしていたのも食べてしまった。犬って悪食なのか。

落ちているものは食べるが、お皿に入れたワンご飯のドッグフードはほとんど食べない。お皿から落ちたのは執拗に探して食べる。この習性は何なのだろう。お皿から食べて欲しいが、お皿を前に出すと後じさりをする。心配性のボスは、落ちたものが好きならと思いい、わざとお皿からドッグフードをこぼしてみた。それは食べるんだな。うーむ。

ある日、畑からモロッコという豆科の野菜を収穫してきた。台所で調理する時、それを一本落としていたことに、私は気がつかなかった。いつものようにキッチン巡回に来た凧太郎はそれを見つけた。

## 10 噛み分け

「ええもん みっけ」という雰囲気、モロツクを睨え、尾をわずかに振りながら、カラダの左右を上下動させ、とことこ、いそいそと自分の座布団に運んで行く。その姿は、笑い出さずにいられないほど、愛らしくも面白い。この頃では オモチャも貰った食べ物も 自分の座布団へ嬉嬉として速歩で運ぶようになっていた。

生野菜なんか食べるのだろうかと思いい、様子を見ていたら、齒こたえが楽しいのか全部食べてしまった。

試しにキャベツの芯とピーマン、ダイコン、ニンジンも実験的に与えてみた。ニンジンは気に召さなかったようだが、ピーマンは多いに気に入ったようだ。後にはニンジンも好物となり、猿の食い残しを漁るというあさましい行為までするようになる。また、畑で採れるミニトマトも大好物になった。ミニトマトはウンチの中で種がほどよく温まるせいか、庭のあちこちにいっぱい芽を出すということにもなり、我が家では、ミニトマトの苗が雑草扱いになってしまった。

人間の食べるものはあげなくていいと本には書いてあったが、喜んでガシガシしている姿を見ると、ついあげたくなる飼い主の心理。ダンボールを食べるよりはよほどマシだろうし、座布団に運んで行く姿を見るのも楽しい。

ボスは葛藤するが、台所で愛らしく上を見上げ、行儀よく座って待つ凜のかわいさについて負けてしまうのである。

凜太郎は、噛むのが好きで好きで、好きでたまらん。とにかく噛みたい。噛んだものは口に入れる。ダンボールも食べる。目が離せない。ちょっと辟易気味でお疲れのボス。

ある日、ボスは凜の傍でウーンと伸びをし、無防備に寝転がっていた。凜は嬉しそうに尾を振りこちらを見ている。何が嬉しいのだろうと見ていると、ボスの顔を目指して、一直線にやってきた。カラダの上によじ登り、ボスの顔に自分の顔を限りなく近づけてくる。噛まれるのかと「瞬ドキッとしたが、何をするのか見ていることにした。凜太郎のしたこと、それはなんとまたまん唇ペロペロ、ペロペロ攻撃だった。されるままになっていたら、短い手でボスの両頬を挟み、なんと唇の中にまで舌をつっこんでくるではないか。な、なんちゅう犬や。

このワンの口を舐める行動は「あんさんボスやと認めませ」というあらわれだということを爺ちゃんから聞いた。こっしてボスは、やっと自他公認のボスになれたのだった。それにしても、唇をこじあけてまで舐めるといふのは、他の犬でもすることなのだろうか？

ボスは、どうしたら、凜の好きな噛み遊びを満喫させてやれるのだろうかと考えた。犬の本にはタオルの引っ張り合いをして遊ぶとか書いてある。が、凜はタオルを持っている手の方を噛みに来る。

人間の手の噛みこちの方がいいのだろうか。あるいは、タオルを持っている手を噛んだ方が、手っ取り早くタオルを自分のものに出れるという知恵か。手の動きがワンを刺激するのか。ナマの手を噛みにくる。噛み足らないと、サークルをいつまでもガシガシと噛んでいる。

ボスは、皮手袋でワンと格闘という暴挙に

出た。爺ちゃんに報告したら「それはあんまりようない」と。確かによくなかった。素手にもますます噛みにくる。どうも凜にとっては「動く手」が「おもちゃ」そのものようだ。

ある日、爺ちゃんに「凜が噛んでしょっがない」とチャットで告げると、爺ちゃんは何を思ったのか「犬風船」という遊びを教えてくれた。人間が、犬の口をまるごとパクッと優しく噛み、鼻に息を入れる。そうするとリスみたいに、犬のほっぺがふくらむそうだ。

好奇心いっぱいの私は、その時たまたま酔っていたので、その勢いで早速実行。犬の鼻面を口の中に入れる、ということは、正気では、多分なかなか越えられない「線だと思っでもあっさり越えてしまった。やってみると面白い。凜は遊んでもらっていると思いつ、ベロベロと舐めてきた。そしてボスの唇をガブ。手もガブ。子犬は手加減をしない。しつかり痛い。

怒ったボスは、酔っ払いの勢いで、目には目、歯には歯でと大人気なく、二カ月と少しの凜の手と口を、ちよつと強めにガブっと噛んだ。犬を噛む。「拳に「線も「線も越えた。凜はキャンと鳴いた。

勝った。とボスはほくそえんだ。そして、キャンと負かしたのだから、もう噛まないだろうと確信した。でもそれは、大きな大きな間違いだ。凜は、ますます遊びだと誤解している模様。噛み合いのスキンシップが嬉しいらしい。私を犬と思っているのではないかと思えてきた。

ある日、動物のお医者さんに行った時「噛んでかなんのです。唇は舐めに来るのでボスとは認めていると思いますけど」と言ったらお医者さんは「普通は、ボスと認めていたら噛まないのですけどねえ」という返事。

言えなかった。ニンゲンも、犬の口や手を

噛んでいますとは。

犬を噛むという「線を越えたのは、爺ちゃんの教えてくれた「犬風船」がきっかけ。心の中で、爺ちゃんが悪い、と人のせいにしてる私。

しかし、犬を噛むという「線を越えてしまつたら、これはこれで、なんか面白い。ワンがワルイ」になった時、ガブリと噛むのは、ボス犬になりきったような気がする。

ちなみに、噛みグセのある犬には、引っ張り合いの遊びは厳禁だそう。引っ張り合いは、ますます噛みグセを助長させるだけだ、ということをお医者さんに教えてもらった。本には、こういう大事なことを書いていない。

それに、本に書いてある躰方法だけでは言うことを聞いてくれない。床を叩いて大きな音を出そうが、大きな声で叱りつけようが、恐ろしい目で睨み付けようが、こと噛むことに関しては、凜には聞く耳がなかった。ボス犬は噛んだら噛み返すを繰り返した。

最初のうちは遊びだと思っていた凜。ボスは、これでええんやろつかと悩み、こんなことをしているから、いつまでたっても噛むのを止めないのだからかと考える。が、痛い目に会うほどに、凜は利口になってきた。

凜が誤ってボスの唇を噛むと、ボスは凜の頭のカワを噛むのだ。キャンキャン。こうして凜は、だんだんじゃれ噛みをしても許される範囲を知るようになる。

カラダで覚えさせるのが「一番ちゃー」と迷いの吹き飛んだボスは確信するのであった。と書きつつ動物愛護協会からは、虐待と怒られるんかなーと一抹の不安がないでもない。

## 二、凧太郎首締り事件

凧太郎がやってくる前に、私は百円シヨツプでいろいろワングッズを仕入れていた。そんな中に首輪もあった。今風にはカラーとかいうのだそつだ。

その首輪を、二カ月に満たない凧太郎につけてみた。この時は、幼さゆえか何の抵抗もしなかった。しかし、首輪は大きすぎた。そのうち穴を開けようと、百円グッズでも決して無駄にせず残しておく私。

満三カ月前にしたころ、来るべくお散歩デビューのため、首輪をつける練習をすることにした。

「ここで、話はそれるが、実は凧太郎は幼児性湿疹というのが体のあちこちにでき、首にもできていたので、首輪に慣らすことを先延ばしにしていたのだ。

この湿疹を診てもらったために、動物のお医者さんに行ったら「この子は自分がありますね」といついふことだった。自己主張をはっきりするといふことらしい。そついえば、二カ月を過ぎたころから、キューインという甘い声で要求が満たされないと見ると、エラソウにウーと唸ったり、ワンワンと吠えたり鳴き方を変えていた。ボスは大人気ないので、唸ったり、吠えたりされるとムツとくる。

ところが、動物のお医者さんの前では、やんちゃでエラソウな態度は微塵もなく、ぶるぶる震えて、ボスにしがみついていた。これまで見たことのない殊勝な態度が面白く、あまりの変貌ぶりに、お医者さんの前だったが、「こらえきれずに吹き出してしまい、笑いのツボにはまっています。」

話を戻そう。首輪をつけるのは難儀な仕事になった。凧は激しく抵抗する。噛む噛む。

ボスはあきらめず、仕事をやり遂げようとする。時々、不思議なほど几帳面になるとい

う性癖のあるボスは、この時、めったに訪れない几帳面モードに入っていた。

首輪の穴はきっちり開けなければならぬ、という観念に凝り固まり、どうしても凧の首周りをしっかり確かめたかった。今考えると、適当に穴を開けたら済むことだったのだが、この時は柔軟な思考が全くできなかった。

首輪のベルト通しさえまならない、噛まればなしの状態で、なにくそと夢中になっていたのだろう。なんとか金具に首輪の端を入れると、その端っこを抵抗著しい凧がハッシとくわえた。そして、引っ張った。

ミニユチ ユアダックスは小さくても、はっきり顔が長い。その長い顔が災いしたのか、ベルトは締まる。

人間でいえば、ウエストのベルト通しにもう一方の端を通して、穴に留め金を入れないで強く引っ張ると、ウエストが限りなく締まる。それが、凧の首で行われた。自ら首を締めていたよつだ。

すぐにそつとは気がつかなかった。やっと端を通せたので、ほっとして凧から手を放し、一瞬目も離していた。

目を戻すと、凧は仰向けのまま、右手を空に突き出し、左手を胸の辺りに曲げている。でも、手が短いので、その左手も空にある。そして口にはしっかりと首輪の端をくわえ、やや白目が出ていた。そして動かない。全く動かない。

ん？ なんてじっとしているんや？ 遊んでるのどこやつ？ ？ ？

一瞬の間の後、ボスの頭の中に警鐘が鳴り響いた。首が締まっておる、ヨ、ウ、ダ。

凧の口をこじ開けようとするも口を開けない。小さいくせに結構噛む力はすごい。白

目をむいて、身動きしないのか、できないのかはわからないが、歯だけはしっかり噛み締めて。

「口開け」と言いながら、しっかりと閉じた口をやっとこじ開け、啞えた端を放させ、首輪を弛めた。ふうー。

そして、そのままダダボの首輪を適当にはめてしまった。

とつてもイヤなものをつけられてしまったらしい凧は、お尻を向けて首を激しく掻く、そして振り返っては、恨みがましく、非難を込めた目でジトっと見る。ハッキリと目でモノを言っている。

「はずせー」

あんまり何回も繰り返すので、根負けした。せっかく苦労してつけた首輪はずし、大きな溜め息をついた。

くそっ。ジト目に負けてしまった。ボスに弱気は禁物なのに。

今日、ボクは初めてかあちゃんに外の世界に連れ出されました。ボクは庭だけでよかったんだけれど、リードたらいいうもんつけられ、無理やり引っ張り出されたんです。

それでも、ちょっとは興味があつたので、座ったり、べちよつと腹ばいになったりして、かあちゃんを困らせながら、ゆるゆると急な勾配の私道を降りていきました。でも、その私道を降りきらないうちに、ワンワンといっぱい吠えながら、白いワンが走ってきました。

いつも、いっぱい吠えている裏の別荘のワンです。そのご主人が、少し遠くから、かあちゃんに「抱いて」と言いました。かあちゃんは素早くボクを抱き上げました。白いワンはかあちゃんの足にまとわりつき、ボクに向かって吠えたまました。

ボクは初めての経験だったけど何も怖くありません。だって、この世で一番「ワイの」は怒ったかあちゃんですから。

別荘のご主人は、「吠えへんし ええこやなあ」とボクに言って、アタマを撫でてくれました。

かあちゃんは「今日が初めての散歩なんです。震えていませんし大丈夫です」などと、ちよつとへんな日本語で、ちゃんと挨拶していました。あわてていたのかもしれないん。

ボクは狂暴で粗雑なかあちゃんにも、こんな一面があるのかと、驚いて眺めていました。あつ、でも、かあちゃんは優しいところもあります。と「応書いておきます」。

かあちゃんはボクを抱いたまま、しゃがんで白いワンをおさえにかかりました。別荘のご主人は、その間にワンを捕らえようとしなかったのかあちゃんはおさえるの

をやめて、立ちあがってしまいました。

吠え続ける白いワンを、別荘のご主人が取り押さえようとしても捕まりません。その様子を見ていたかあちゃんは、大きな声で笑い出しました。ボクはええのんかなあと思っ  
てしまいました。

別荘のご主人は、もう二回ボクに「ええこやなあ」と言っ  
て、やっと捕まえた白いワンを抱いて帰ってゆきました。

かあちゃんは家に帰ってから僕の耳元で「あんた ちょっ  
とくらい吠えたらええんや」と言いました。

いつもは吠えたら怒るくせに、ボクはどうしたらいいでんじょう？ 爺ちゃん。

追伸

この前の首締まり事件に懲りたのか、あのやたらに重い不愉快な首輪から軽いのに変わった  
っていました。首輪付きリードたら言っ  
もんらしいです。

母ちゃんは僕の抵抗に、きつと負けたと思  
います。ひひひ。

九月二八日、凧太郎満四カ月のその日、実家に帰った。

美人のパパワン「ベル」、男らしくて凧々しいママワン「ティアラ」、一年と数カ月前上の楚々とした美人の姉さんワン「マロン」、ニ  
ンゲンの爺ちゃんファミリールと久々の対面だ。

爺ちゃんは、凧がみんなのことを忘れていないか、みんなが凧のことを忘れていないかを心配してくれていたが、杞憂に過ぎなかった。ワンファミリールはすぐに交じり合  
って遊び始めた。ミニチュア・ダックスが四匹というのは、なかなか壮観。みんなじ  
ととしていないので、見ていたら目が回りそ  
うだ。

では、凧ファミリールの紹介をしてみよう。ティアラママは、初対面の時、凧々しく男らしいと感じたが、それは産後の子を守る姿だった  
ようで、実はかなりの美形だということとがわかった。細面の、とてもかわいらしいワンだ。二回目の対面のこの日、最初は人見  
知りをしていたのか、警戒していたのか、よく吠えた。彼女の前で両手を揃え、頭を下げ「ワタンが凧太郎を育てています」という挨拶をした。その挨拶に反応したわけでもない  
だろうが、時間がたつと傍に寄り添うようにお座りをしてくれた。

ティアラは「かわいい」という言葉に敏感に反応する。ニンゲンの「かわいい」という声に「ソレワタシノコト？ ワタシノコトデシヨ。ワタシカワイイ？」と愛くるしい瞳で見上げる。仰向けに寝て、お化けの手をして、お腹を出して、「ワタシノオナカナデテ、ナ  
デテ」と言っているようだ。そしてそれはちょっ  
とばっかし、いや、かなりしつこか  
た。





マロン姉さんは、ベルとティアラの最初の子どもで、犬の世界ではよくあることらしいが、ちょっとばっかしおバカだそうだし、「でも、そこがまた飼い主にはかわいい」と爺ちゃんは言う。

この前会った時と、また雰囲気が変わっていた。二年と数カ月では、もう成犬かとも思うのだが、ミニチュアダックスでは、まだ毛色が変わることもあるらしい。ニンゲンに例えて言えば、宝塚出身の女優、涼風真世さんのような切れ長の涼しい目、控え目な感じも漂う。おまけに美しいソバージュヘアの耳は、あんまりキレイなので、見ているだけでうっとりする。犬にうっとりするなんて思いもかけなかったことだが、本当にうっとりで見惚れる。

頭の真中の毛が少し立っている。その毛が立っている間は、全体の毛の様子がまだ変わるといふ可能性があるらしい。次に会うのが楽しみだ。

この日は、ベルをゆっくり観察できなかった。凜太郎はベルの子犬時代にそっくりだそう。お父さんも美人ワンなので、凜の将来もなかなか楽しみだ。何を見ても聞いても、親バカ反応の母である。

それにしても、華麗なる一族だわん。

人間のお母さんに、「族の子犬時代からの写真を見せてもらった。」

ミニチュアダックスというのは生まれてすぐのころは、お世辞にもカワイイとは言いがたく、むしろ大変ぶさいくで面白いカオスをしている。

どうしてこの犬の耳が長く、大きくなり、カオがとんがり、胴が長くなるのか不思議だと思えるような子犬時代を経て、日に日にダックスらしくなっていく。

私は、日ごろの育児の悩みを相談してみた。凜太郎は落ちているものは何でも口に入れる悪食で、その悪食ぶりはカラス並ではないかと思っている。近ごろは、スーパーの買い物袋をぶら下げた「こみ箱」に鼻先を突っ込み漁る。

実家のワンも同じだそう。この家ではニンゲンのお姉さんに「生きたゾーキ」と呼ばれていた。「ほれたモノを舐めて、床をキレイにしてくれるそう。」

ダックスはブランド犬だから、高級品というイメージがある。犬育て初心者の私は、拾い食いなんかしない、と勝手に思っていたが、犬なのだから、することはみな同じみだ。

悪い子の時、いい子の時、一緒に暮らすといろいろあるが、雑種犬もペットショップの高級ブランドワンも、飼う人にとってはきつと「私のワンは世界」になるのだと思う。

もちろん、凜は今や私の世界。

お散歩デビューから数日、凧太郎が散歩嫌いにならないように、無理強いをしないといけないと思い、リードを無理に引っ張ったりはしなかった。

凧太郎は最初の日と変わらず、座ったり、べちょーっと腹ばいになったりして、ちいとも歩かない。凧太郎との散歩を楽しいものと勝手に期待していたボスのルンルン気分は、日ごとに萎んでいった。

散歩の往路、なかなか歩かない凧に付き合いきれず、気短なボスは抱いていくようになった。「ほな、家に帰ろ」と言って、下におろすと、それはわかるようで、復路は先に立って家を目指して歩く。この時、ボスは気がついていなかったが、散歩の主導権は凧太郎が握っていたのだ。

凧太郎が実家に帰った時「散歩が嫌いだよだ」と爺ちゃんに報告した。パパワンも散歩が嫌いだった。父親似か。実家を後にする時、人間のお母さんと爺ちゃんが、ママワンと姉さんワンの散歩の見本を見せてくれた。ちなみにパパワンは散歩とわかるや、庭に逃げてしまった。

凧太郎は相変わらず、途中で座りこんで、キリッとした目をこちらに向け、なんだかわからないけれど意思表示をして動かなくなる。見かねた爺ちゃんが、凧太郎のリードを手を取った。

爺ちゃんは強引に、ズズズーッと引っ張る。傍で見ていた私は、「そんなかわいそう」「あんまりキツイことせん」といて、「バカ親ぶりを発揮して、ぶつぶつぶつぶつ」

爺ちゃんは、かまわずズズズーッと引っ張る。凧太郎は、爺ちゃんに精一杯抵抗していた。

ワンはニンゲンの左側を歩かせ、ニンゲンより先には行かせないなど、散歩指導の基本

があることを教えてもらった。

「夜明けて、翌日の散歩の時間、きのう」かわいそう」と言った舌の根も乾かぬうちに、そうつぶやいた事も決して忘れてはいなかったが、ボスは厳しい散歩指導を始めた。

凧はいつものように、べちょーっと腹ばいになって「イヤや 動かん。そっちには行きとくない」とでも言いたげなキリッとした目をこちらに向けている。そういう目がまた何とも言えなくイイのだけれど。ここでバカ親になってはいけなさとばかりに、ぐいーと、引っ張る。半ば宙吊り。

「さっ、い」と声をかけるも、またしてもべちょー。とつても反抗的。今度はズズズズーとしっかり宙吊り。空中遊泳的散歩。

ボスは、瞬間すばやく辺りを見まわす。やることはエゲツナイが、内心ドキドキもので、人目を気にしている。

ボスの「コロコロ」誰が見てもこれは動物虐待に見えるやろな。ああ 誰も見てはらへんよかった。」

凧の「コロコロ」きのうの爺ちゃんの方がよっぽどマシや。ほんまにかあちゃんは、することかえげつない。こつなったらあきらめなしゃないな。そやけど、エゲツナイことするわりには氣ィ小さいな。あたり見まわしてばっかりいる。ひひひ もうちよつと反抗したる。」

ボスの「コロコロ」ほんまに、「一回引っ張る」とにヒヤヒヤして、あたりをみまわすのはかなわんな。はよちゃんと歩いてくれたらこないな思いませんでええのに」

かくして、一人と二匹の戦いは続くのである。

## ワンと一緒のハイキング

一人と一匹の散歩主導権闘争はボスの勝利で終わったかのように見えた。

少しは散歩らしくなった二〇〇三年一〇月のある日、ボスは突然思い立ち、凧太郎を伴いハイキングに出かけた。目指すは名張市赤目四十八滝。

一度は行ってみたいと、かねがね思っていた赤目四十八滝は観光名所で、紅葉の季節はそれはそれは美しく、人も多いらしい。ワンを伴い行くのなら、ボスにもワンにも、人少ない平日の方がきつといい。

今では車にも慣れた凧太郎を助手席に寄せ、簡単手作りお弁当とワンの食器、水、ボスのコーヒーなどをリュックに詰めて出発。

入山所で「犬も一緒に入っていいですか?」と聞いたら、リードを付けていることと、ウソチの始末をちゃんとするならOKの返事。良かった。

どこまで歩くか目標を決めず、透き通った美しい川の水を感嘆の声で眺め、滝と岩を愛で、川沿いの木々の中を一人と一匹は行く。

途中、何度か川辺で休憩もし、凧太郎の短い足では登れない階段や、じゅくじゅく道は抱いて歩いたりしましたが、往復コースの最後の岩窟滝まで行ってしまった。

岩窟滝の滝壺近くの岩に座り、二匹は仲良くマイナスイオンシャワーをたっぷり浴び、ともに水分補給もし、お弁当の残りを分け合って食べ、なんとなく良い気分。

結局六・四キロを歩いた。凧太郎もほぼ歩いた。すごいぞ。五カ月に満たない子犬に、ひどいことをしたんだろうかと一抹の不安と後悔も少々だが、凧太郎は途中足を痛めたボスを気遣う、という面も見せた。

リードを引っ張るといってもせず、適度なたわみを作り、足が痛いと言っボスをちらちらと仰ぎ見ながら進むのだ。その時目

と目が合う。ボスは感激。犬というのは主人を気遣うものなのか。この辺が猫とは違うのかもしれない。

ところで、この日の道中、道行く人に凧太郎は「かわいい」「かわいい」と声をかけられ、愛でられていた。

二匹の休憩中に、遠くから凧太郎を撮ったお兄さんが、事後であったが「写真撮影をしました」と良心的な報告をしにきてくれた。当然予想されることだが、撮影されたのは凧太郎だけである。

この日を境に、凧太郎はとても散歩好きの犬になった。散歩という「トバ」に反応するとともに、散歩に行きたいというか、どちらかというと、「はよ連れて行け」といわんばかりの意思表示を声と態度で現すようになった。

ボスは勝ったのか負けたのか。その後は、目と口でモノ言っ凧太郎に散歩に連れ出されている日々である。

爺ちゃん曰く「凜太郎はボス犬タイプ」。お医者さん曰く「自分のあるワン子」。そういうタイプだからかどうかはわからないが、三カ月にならないころから、私にマウンティングを仕掛けてきた。凜太郎にしてみれば、ボスの座争いのつもりだったかもしれない。本には対策として、犬用のクッションを与えなどと書いてあり、そのうち百円ショップに見にいこうと思いつつ「日伸ばしになっただけだ」。

マウンティングは、だいたい腕に仕掛けてくるので、振り払うということを繰り返す毎日。ちょっと寝転んで、片肘をついていても、座っていても仕掛けてくる。ボスはちいともゆっくりできない。あんまりしつこいので、だんだんと腹がたってきた。そして、突然思い浮かんだことがあった。

それは、私がワンにマウンティングを仕掛けることだ。早速実行に移してみた。凜太郎のお尻にマウンティング風に両手を置き、前後上下にゆらす。体重はかけずともニンゲン対ワン子なので、当然勝った。

すると凜太郎は、まいったのお腹だしポーズ。でも、誰に似たのかあきらめも悪いらしく、またマウンティングを仕掛けてくる。そうなればマウンティングで対応。その後はあきらめたようで、平和な時間が戻ってきた。

後に、育児対策相談役の爺ちゃんにこの話をしたら、「それは思いつかなかった」と。人間が犬にマウンティングをするなど、あまり思いつくものではないかもしれない。小さなワンのマウンティングに困っている飼い主は、この方法を試してみられてはどうだろう。

ボクは確かにあの日から、散歩もいいも

んだな、かあちゃんと一緒に歩くのも悪くないやと思うようになった。けど、まだ小さいボクにあんなにたくさん歩かせたから、ボクの足は短いままで成長しなかったんだ、と思っっている。ボクの足が短いのは絶対かあちゃんのせいにできない！。プンプン。

それから、こんなに小さなボクにマウンティングを仕掛けてくるなんて！ かあちゃんのことにはホントに信じられない！

「待て」を覚えさせられた時のこともついでに言っておこう。その時、ボクはまだ三カ月にもなっていないかった。それに、最初は「待て」が何のことかわからないじゃないか。わからないから目の前のご馳走を口に入れたら、かあちゃんはボクの口を両手でこじあけて、せっかくボクが口に入れたものを無理やり取り上げるんだよ。ほんと信じられない。で、また「待て」をさせられたんだ。できるまで何度もだよ。ボクは早く食べたい一心で覚えたよ。そしたらボクのことを「めちやくちゃ賢い」って喜んで、爺ちゃんに報告していた。ま、かわいいっていうか単純っていうか。そういうかあちゃんはキレイじゃないけどね。

「この際だからもうひとつ。かあちゃんはボクをマジで噛むんだぜ、悪い子だと言って。言うことをきかなかったら噛むと言って脅かすだけじゃないんだ。かあちゃんの「ワイ」ところはホントに噛むってことなんだ。それもボクが鳴くまで噛む。信じられない？」

桃ちゃんに聞いてみたよ。桃ちゃんのお母さんも噛む？。って。桃ちゃんのお母さんはそんなことはしないって言ってたよ。やっぱり、うちのかあちゃんはフツーじゃないみたいだ。

でも、ボクもだんだん賢くなってきたから

ね。痛くなくても「キャイン」って鳴くんだ。すると、かあちゃんは止めてくれる。けどね、噛まれる前に鳴いてしまった時があって、あやうくお芝居がばれる時もあった。タイミングが大事なんだ。これはかあちゃんには内緒だよ。ね、ボクお利口だろ。

それからマウンティングのこと。大きな犬は、小さな犬に優しいのが犬社会なんだぞ。桃ちゃんちのタロー兄ちゃんはとても大きくて、ボクが精一杯背伸びしても、足にしかマウンティングができないくらいなんだ。でも知らん力才をして、させてくれている。大きな犬はそれくらいの器量がなけりゃね。

ボクはこういうことをかあちゃんに言うて聞かせてやりたいし、常々言うてもいるのだけれど、ぜんぜんわかっていない。ボクの言っているコトバが、ぜんぜわからいみたいで「何言つてんの、ワンワンうるさいな」と言われるだけなんだ。だから言うだけ無駄だと、このごろわかってきた。

ボクがかあちゃんの「コトバ」美味しい、食べる、おすわり、待て、散歩い、「ゴロン」、タッチ」を明確に理解できることに比べ、かあちゃんは大語がまったく理解できていない。ニンゲンに比べたら、ボクたち犬族の方がはるかにお利口だとボクは思っているんだ。ま、何をしでかすかわからないかあちゃんが「コワイ」というのはあるから、さわらぬ「噛み」に崇りなしたワン。

凧太郎にガールフレンドができた。その名は桃ちゃん。凧太郎より八日早く生まれた少しだけお姉さんのワン。同じ地区(都市で言う町内)にいる。

桃ちゃんもミニチュアダックスで、レッドのロングヘアード(毛色がレッドで長い毛)、凧太郎と一緒に。桃ちゃんの額には、二筋濃い茶色の毛が縦に走り、ベッカム選手のようにだ、とご近所で評判。

評判だけは聞いていたが、出会ったのはお互いに三カ月も過ぎ、予防接種も終わり、お散歩解禁になってからのことだった。

どうやら互いに一目で好感を持ったみたいで、友達ワンになったようだ。

二匹の遊び場所は、桃ちゃんの家。追いかけてっこをし、じやれては交互にお腹を見せて、犬社会のルールの参ったをし、また追いかけてっこを繰り返す。一匹だけを見ていたのではなく、犬同士が遊んでいる風景を見ているというのは、いいものだなーと思っただ。

そんなある日のこと。いつものように桃ちゃんの家で仲良く遊んだ二匹は、喉が乾いたようだった。庭の水鉢に、そろって短い後ろ足で立ち、胴を伸ばし、水鉢の端に、やっぱり短い手をかけて、アタマを突っ込んで水を飲んでる。二匹が二匹とも同じ格好で水を飲む姿は、それだけで絵になっていた。その後姿を見ながら、それぞれのボスは、ほのぼのとしたココロモチになっている。

ところで、桃ちゃんは高いところから平気で飛び降りたり、飛び乗ることができる。桃ちゃんのお母さんから聞いた話では、わずか三カ月の時に、軽トラックの荷台から飛び降りたそつだ。運動神経抜群のおてんば桃ちゃん。

凧太郎は、二カ月と少しの時、写真撮影の

ために乗せていたテーブルから落ちたのが心の傷になっているのか、高いところが苦手だ。

テーブル落下事件は、かわいい顔をアップで撮りたいがために、庭のテーブルに乗せた時に起こった。テーブルの高さは八〇センチ。凧を乗せたまま、デジタルカメラを触っていた。凧はテーブルの端に足をかけ、下をじっと見ていた。そこまでは見ていた。そして目を離れたとたん、落ちた。

実際は飛び降りるつもりだったのか、意に反して落ちたのか、単に着地失敗に終わったのかは定かではない。凧は歩けるようになった時から顔がデカいため、よくアタマからこけていたそうだ。この時も、飛び降りるつもりはなかったのに、カオの重さゆえに落ちたのかもしれない。

結果として地面にギヤインと接触。そしてなぜか次の瞬間、脱兎のごとく、逃げるかのように前方に走り出した。私が聞いて見たのは「ギヤイン」という声と前方に走り出したところで、落ちるところは見ていない。

そういうことがあったためかどうかはわからないが、凧は少し高いだけで降りられないし、飛び乗ることもできない。

さて、二匹が遊んでいる時、行きついたところが五〇センチほどの高さの石の上。桃ちゃんは平気で飛び降りて、地面に着地。そこから降りられない凧太郎は立ち往生。凧太郎は、ワンワンと鳴き、どうも桃ちゃんに「こっちに戻ってきて」とでも言っていたようだ。

凧太郎の懇願を聞いてか、やがて桃ちゃんが石に飛び乗って戻ってきてくれた。そして二匹は、また遊び始めた。

ほとんど同じ大きさの二匹のミニチュウアダックス、遊んでいる姿はともかわいらしく、見ているニンゲンをほんわかさせ

てくれる。



桃ちゃんの庭で(向かって右が桃ちゃん)

凧太郎だけを見ていると飽きるということはない。共に生活していると笑ったり、怒ったりと忙しい。自分一人だけでは、起こり得ない感情が湧いたり、有り得ない何かが起こったりする。それは心の中の変化であり、実際に何かが起こってしまうということでもある。

二匹が遊ぶ姿は、それとはまた少し違うものを感ぜさせてくれる。うまく言えないが、仲良く遊ぶ犬たちだけの世界、その姿をただ見ている私、安らかに静かな時間、そんな感覚を得られた。

良かったね、凧太郎。お友達ができて。かあちゃんは、とっても嬉しい。



桃ちゃんと凜太郎が興奮して遊んでいると、桃ちゃんのお父さんは、「ケンカしんとき」と二匹にコトバを投げかける。どうも、お父さんには桃ちゃんがいじめられているように見えるようだ。

桃ちゃんのお母さんは、そう言ってお父さんに「遊んでるだけや」と言われる。

確かに二匹の声も姿も、ケンカしているようにも見え、聞こえる。凜太郎が桃ちゃんにマウンティングを試みたりするので、それもお父さんには気に入らないのかもしれない。

桃ちゃんのお母さんは平気で見ていくけれど、お父さんの顔つきが変わるのを私は見逃さない。

桃ちゃんはお母さん子なのか、お母さんが留守の時に遊びに行ったら、借りてきた猫のようにものすごく大人しい。まるで凜太郎が一人で桃ちゃんをやっつけて、いじめているようにも見えなくはない。

お母さんがいると、凜太郎と桃ちゃんは互角で、後半はいつも凜太郎の形勢がはなはだ危うい。むしろ桃ちゃんが優勢。でも、お父さんは、凜太郎をやっつけているような強い桃ちゃんの姿を知らない。お母さんは、借りてきた猫状態の桃ちゃんを知らない。

知っているのは私と凜太郎。

桃ちゃんは、飼い主家族の誰をボスと認めているのか、私が見ていると、どうもお母さんがボスみたいだ。

ある日遊びにいったら、お母さんは留守だった。お父さんが「遊んだって」と桃ちゃんを庭に連れてきてくれたけど、桃ちゃんは「借りてきた猫」になってしまった。お父さんはしばらく家の中。次に出てこられた時

に、凜太郎がちょうどマウンティングを試みていた。お父さんの顔つきが変わった。私はなぜか恥ずかしくなった。お父さんは桃ちゃんを抱き上げ、サイナラも言わないで家の中に入ってしまった。

後日、お母さんが「お父さんいったり、子どもができたらどうするんや」と言ってるねん」とカラカラと笑われた。それを聞いた私も大口を開けてガハハと爆笑した。二匹とも四カ月と少しのころのことだ。

お父さんは、桃ちゃんがオンナノコなので、心配でしょうがないようだ。桃ちゃんのお父さんも、かなりの親ばかさんかも。

20 桃ちゃんとお母さんとお婆ちゃん

ボクのお父さんとお母さんとお婆ちゃん、ニンゲンのお父さんとお母さんとお婆ちゃんの四人暮らしです。

ある日、お母さんがお客さんにヨモギ大福三つと沖繩土産の黒砂糖をまぶしたピーナツと丹波黒豆納豆を出しました。お母さんは、食卓テーブルにそれを置いたまま出掛けました。お婆ちゃんはゲートボールに行き留守でした。桃ちゃんは一人留守番。

お母さんが帰ってきたら、テーブルの上のお菓子は、お皿だけ残して全て無くなっていました。お婆ちゃんはゲートボールから帰ってきて、疲れて寝ていたので晩ご飯を食べませんでした。だから、お菓子はお婆ちゃんが食べたのかもしれない。

お父さんとお母さんの目には、ももちゃんが大福三つ分ほど、いっぺんに太って見えたので、その日は、桃ちゃんに晩ご飯をあげませんでした。

翌日、ボクは、かあちゃんと一緒に遊び行きました。桃ちゃんのお母さんが、かあちゃんに「桃 太ったように見えへん？」と聞きまじった。

ほとんど毎日のように、桃ちゃんに会っているボクのかあちゃんの目にも、桃ちゃんは太っているように見えたらしく「そう言われたらそんな気がする」と答えていました。

お皿のピーナツと黒豆を食べたのは、桃ちゃんみたいです。お母さんがお皿を洗ったら、お皿がねばねばしていたそうです。でも、大福を食べたのがお婆ちゃんか、桃ちゃんかは謎のままです。お母さんはお婆ちゃんに、まだ聞けていないそうです。

ボクは桃ちゃんに「桃ちゃんが太福食べたん？ それはどんな味？」と聞いてみたかっ

たのですが、いつものように遊び始めたの  
ですが、すぐにそのことは忘れてしまいました。

桃ちゃんとお母さんとお婆ちゃんはお婆ちゃんも食べてないというのが後で分かりましたから。でも、よもぎ大福はラップで包んであったそうですから、桃ちゃんが食べたとしたら、どうしてラップを外せたのか。女の一念岩をも通す、もとい、ラップも外すのでしょうか？

できることなら、ボクもラップの外し方は知っておきたい。

それにしても桃ちゃんってすごいな。ボクなんか考えもつかないことができる。椅子に飛び乗ってから、テーブルの上に飛び乗るなんて。アタマもきれるし、運動神経もいい。ボク完全に負けてる……。

青山の冬は早くて寒くて長い。初めて青山の冬を体験した二〇〇二年、私は、顔が寒くて目が覚める経験をした。

青山に来る前に暮らした京都市や滋賀県大津市での秋や晩秋は、ここではすでに初冬、真冬という体感温度になる。

そして二〇〇三年、暑い夏の後、涼しい秋が来たなと肌を感じたら、九月にしてもう朝夕は寒い。わずか二・五キロ、四カ月の凧太郎には十分にこたえる寒さのようだ。一〇月八日、ボスが寒いと感じて、凧太郎をふと見たら、お座りをして短い前足を踏ん張って、ぶるぶると震えていた。目は一心に何かを訴えるように、「こちらを凝視している。」

目と目が合う。犬の目とニンゲンの目が、がちりと合う。貧乏所帯、節約が身上で、我がことならば重ね着ですむが、こと凧太郎に関してにはひたすらに甘い。早速灯油を買に行き、夜間冷える日はストーブをつける。節約に励む私が、ワンのためにストーブをつけることを当たり前のようにできる、という変化。自分一人だけなら考えられないことをしているが、おかげで私も暖かい。

犬の飼い方の本には、決してしてはいけないことの「一つに、一緒に寝ることが挙げられている。どちらがボスカわからなくなるので、躰上好きくないということだ。本に忠実なボスは、夜間は凧太郎を居間のサークルへ入れ、別々に寝ることを厳格に守っていた。

けれど、震える凧太郎を見た日に、厳しさは一瞬で崩壊、ベッドを共にすることを決めた。動物のお医者さんから、ミニチュア・ダックスのスムーズヘアードが、青山の寒さで死んだという話を聞いていたからだ。

凧太郎のようなロングヘアードは大丈夫だろうとは言ってくれていたが、寒さに弱い

のは確かだろう。

シッコやウンコ、粗相の心配はあったものの、震える凧太郎を一人寝かせるのは、ものすごく不憫に思え、心配でもあったのだ。

ワンを腕に抱き「ええか 凧太郎、シッコやウンコがしとなくなったり起すのやで」と、何度も静かに、そして、しつこいほど言い聞かせ、寝室に連れていった。

ベッドに降ろそうとしたら、凧太郎は腕から飛び降り、めっちゃくちゃ嬉しそうに飛び跳ね始めた。ニンゲンの子どもが、トランポリン遊び初体験のごとくに飛んでいる。ベッドの端から端まで飛び跳ねている。それほどに嬉しいのか。ワンが相手でも嬉しそうにしてくれると、なんだかこっちも嬉しい。その様子をしばらく眺めていたら、こっちが寒くなってきた。

興奮する凧太郎を抱いて、布団に潜り込む。嬉しさの覚めやらない凧太郎は顔や口を舐めまくる。堪忍してくれというほど舐めまくる。そして、やっとおとなしくなった。

ああ なんとという気持ちの良さだろう。なんともいえない暖かさと感じ。シルクのようなカシミアのような、ピロイドのような、はたまたフリースかアクリルのマイヤー毛布か。例えば、だんだん庶民的になってきたというか、生活レベルを伺わせるというか。ともかくにも何とも言えずに気持ちよく、そしてほどよく暖かい。

起きて抱いている時より、数倍気持ちの良い肌触り。それはバジヤマの上からでも感じられる。この気持ち良い行為が、なぜ本では禁じられているのか。ひょっとしたら、ニンゲンが止められなくなるからかもしれない。めっちゃくちゃ気持ちがいい。

けれど、気持ちのよいことばかりではない。互いに身を寄せ合い、気遣って寝るのは、熟睡の妨げにもなるし、カラダが伸び伸びできないということもある。寝返りひとつに

も気を使う。つぶしたらどうしよう、と。

体はままあったが、私が凧太郎を離したくな  
くなっていた。

犬の本などクソクラエ。

最初の夜は、そこそこ緊張した。夜中に凧太郎が舐めて起こした。言い聞かせを守ったのか。早速抱いて居間のワントイレに連れていった。ちゃんとシッコをした。賢いと誉め撫でて、また寝る。居間は寒い。ボスの背中に寒気が走る。

ベッドに戻り「凧太郎、頼むし背中温めて」と頼む。凧太郎はボスの背中にくっついた。ワンと背中合わせで寝る。その感触もなかなか感動。犬の背中とニンゲンの背中がホントに背中合わせ。多分これには偶然の結果なのだとは思っが。

眠りの中でシャッシャッというモノ音が聞こえる。シャッシャッ、カサカサ、シャッシャッ。いつまでも続いて聞こえてくるので、やっと目が醒めた。夢中ではなく、実際に音がしていたのだ。

音の出所を確認するべく電気をつけた。なんと凧がベッドの周りをくるくると何回もまわっていた音だった。緊張して寝ていたつもりが、いつのまにか熟睡して、どうも突き落としたらしい。あるいは、勝手に落ちたのかもしれないが。拾い上げ、ごめんなーと言って抱いた。

翌朝、目覚めたボスは伸びと大あくび。なんとその口に、いきなり凧太郎の鼻面が突っ込まれてきた。「一度に目が覚め「な、なにするのんー」」。

「かちゃんはいつも口の中にいっぱい食べ物を入れてる。何が入っているのかいっぺん見たかったんや」と凧太郎は思っていたに違いない。

そしてその冬中、電気アンカは使用せず、凧太郎が私の炬燵になった。起きたてのあくびの度に、口をめがけた鼻面に遭遇という事

二〇〇三年の年末から二〇〇四年のお正月にかけて、桃ちゃんの家には桃ちゃん「族が集まる時、ボクも呼んでもらうことになった。桃ちゃんのママワンのプリンちゃん、桃ちゃんの姉さんワンの桜ちゃんと妹ワンのマリリンちゃんがやってくる。オトコノコはボクだけらしい。

桃ちゃんのニンゲンのお母さんとボクのかあちゃんは「お正月は凜のハーレムやな」と喋って笑っていた。ハーレムが何のことかボクにはわからない。

最初は年末、かあちゃんが桃ちゃんの家でつきたてのお餅を「馳走になる時、ボクも連れていってもらった。桜ちゃんが来ていた。桜ちゃんはクリーム色のワン。毛がとても細い。ボクは桜ちゃんが気になってしょうがなかった。ボクは桃ちゃんを忘れて、桜ちゃんを追い掛け回してしまった。桜ちゃんはボクが恐いのか逃げまわる。でもだんだん慣れてきて、少しはボクの相手もしてくれるようになった。

少し慣れてくると、ボクはマウンティングがしたくなった。そして桜ちゃんにマウンティングをした。ボクはボクのパパワンやママワン、姉さんワンにもいつもしかけるけど、大抵はみんなにマウンティングをされる羽目になる。ボクは向こう見ずなのだろうか。だとしたり。きつとかあちゃんに似たんだ。

この日、大きな声では言えないけれど、ボクは初体験をしてしまった。かあちゃんはびっくりして「あっ」と言った。かあちゃんの「あっ」は怒られる時によく聞くので、ボクは、またワルイコトをしてしまったのだと反射的に思った。ボクのおチンチンがいっぱい出て、床にオシッコでない何かを

「ぼした。おチンチンはぜんぜんひっこまない。かあちゃんがオロオロしている。桃ちゃんのお母さんが「大丈夫や、そのうちひっこむ」ここにこやかに落ちて着いて言ってくれた。かあちゃんが安心したのがわかったので、ボクもなんだか安心した。でも、そのひっこまないおチンチンめがけて桃ちゃんの口が来た。ボクはキャンと言って逃げた。おチンチンは桃ちゃんのお母さんが言ってくれた通り元に戻った。ああ、良かった。

そしてお正月、プリンママやマリリンちゃんとも初対面となる日。ボクとかあちゃんが桃ちゃんの家に行った。桜ちゃん、マリリンちゃん、桃ちゃんが庭にいた。プリンママはそこにはいなかったけど、大きな声が聞こえていた。

ボクはただ嬉しかった。ボクと「緒のワンがいっぱい。オンナノコのニオイだ。マリリンちゃんは薄いグリーンのような毛並み。でも、桃ちゃんと遊ぶようなわけにはいかない。みんなボクを恐がっているのだろうか。ボクは相手をして欲しいから追いかけるのだけど、桜ちゃんもマリリンちゃんも逃げる。

そんなところにプリンママがニンゲンのお母さんに抱かれて登場。ボクは何も考えていなかった。かあちゃんたちは喋っていた。お母さんの手から降りたプリンママ。プリンママがボクに近づいてきた。次の瞬間ボクはキャウンと言って「ビッコ」をひいて逃げ出していた。

かあちゃんたちは何が起こったのかとボクを見た。ボクは恐かった。尾を巻き込んでしまった。そんな情けないボクをみんなが見ている。穴があったら入りたい！

プリンママはすぐにニンゲンのお母さんに抱かれた。ちょっとそれで安心したけど、それはあっといつ間の出来事だった。

ボクの出会いのすべて、パパワン、ママワン、姉さんワン、桃ちゃん、桜ちゃん、マリちゃん、タロー兄ちゃん、それから別荘の白いワン。今まで攻撃されるということはなかった。初めて体験する威嚇なしの攻撃。出会うワン全てが友好的ではない、ということをとを初めて知った瞬間だった。

ニンゲン界もそんなんだろうか。ボクのアタマをふっとそんなことをよぎった。

かあちゃんはボクの深遠なる気付きも知らないで「凧のハーレムは三秒で終わったな」と高らかに笑っていた。

ヒトの気も知らないで、かあちゃんはいいい気なものだ、とボクはつくづく思った。

凧太郎と私はいつも一緒に寝ている。生後九ヵ月と少々の三月二日、時間は定かでないが、まだ暗い中、凧太郎が起きだし、枕の上に吐いた。犬の吐く時の音はなかなか気の毒な音だ。その音で目が醒めた。

目覚めた私は電氣をつけて吐瀉物を見た。前夜の食事の未消化が一塊。一回くらの嘔吐は、そんなに気にすることもないだろうと夢うつつのまま、吐いたモノをティッシュで包み、そのまままた夢の中へ。何しろ疲れている。

この頃、私は毎朝六時起床。二〇〇三年の年末から失業に別れを告げ、勤め始めていたのだ。仕事は牛舎の餌箱掃除と通路掃除。朝の八時から二時までの四時間パート。

私起きてから凧太郎はまた吐いた、二回目。そして水を飲み、今度は大量に吐く、三回目。庭でウンチをしたあと、また吐く。水を飲むもまた吐く。合計五回。とても心配になり、七時前に動物のお医者さんに電話をした。お医者さんは、脱水症状になる可能性もあるから連れてきてくださいとのことだった。

私は仕事を電話で休みたかったが、牛相手だから、そんなわけにもいかないと思い、いつもより早く出勤して、一人で餌箱掃除にとりかかり、上司が出勤した時点で、涙をぼろぼろこぼしながらに事情を話し(勝手に泣けてしまう)、餌箱掃除が終わったら帰らせてくださいと宣言。

脱兎のごとく帰宅したら、嘔吐が新たに四ヶ所。心配で心配で。病院に連れて行き、血液検査の結果を聞くと胃炎ということだった。心配のあまり思考回路がショートしていた。

こんな時の餌のやり方を聞いたはずなのに、帰宅したらすっかり忘却のあなた。すぐ

に動物のお医者さんに電話をして聞く。「消化のよいものを与えてください」。どんなものが消化のよいものかわからない。それも聞いたら、「犬にとって一番消化のよいものはドッグフード」ということだった。

お湯につけてふやかしてもいいということだったが、凧はドッグフードが嫌いのようで、普段でも一粒ずつ口に運んで無理に食べさせていたのだ。

注射とお薬代で、私の六時間分の賃金がパー。パートを始めてから、すぐに時給計算で出費高を考慮してしまう。セコさが身についたというか。パートの収入だけで食べているのでしょつがないと言つべきか。お金で命と安心が買えるなら、それがいい。お薬はガスターとプリンペラン。ガスターってニンゲンと同じ。私も飲んでいたことがある。

動物のお医者さんが一番心配していたのは、腸閉塞の可能性ということだった。凧は普段から目を離したら紐や布を齧っている。食っているかもしれない。何でも出したその手で片付けない私が悪いのだが、床に脱ぎ捨てたGパンも被害にあったことがある。何を食べるかわからない。お医者さん曰く「ミニチュア・ダックスは悪食」だそうだ。話を聞いてしまった私はますます心配。

その時、病院には、ニセンチくらいいのセロテープを食った猫や、食パンなどの袋を止めてある金色のヒモを食ったレトリバーが手術して入院していた。お医者さんの説明では、セロテープやヒモだけで詰まるのではなく、普段から食っている食べ物以外の諸々のものが運悪くというか、それと絡まって、くっついて大きくなって腸が詰まるということだった。

そんなこんなで重度の心配性に陥り、思考回路はパニック。とりあえずは凧の様子が落ち着いたので「安心」。

三月二十五日三度の嘔吐。三月二十六日、早朝、枕元でクーンクーンと鳴き、私を起こそうとしている。眠い私は起きない。すると我慢しきれなくなって、初めての粗相をベッドの上でした。そして、それは下痢だった。

凧太郎が私と暮らし始めて、初めての下痢。それまで、ただの二度も下痢便をしたことがなかった。粗相に対してワルイコトをしたと思っているのか、凧は具合が悪いにもかかわらず、アタマを低くし、怒られるのを待つ、「ごめんなさいのポーズ」をしている。

私は「起きひんかったかあちゃんが悪かったし。怒らへんし」と言った。そして凧を連れて台所へ。今度はベットのシーツの上で下痢便をよく見たら血が混ざっていた。私はまたもやパニック。超パニック。

しかし、生き物相手のパートだから休んではいけないと思い、後ろ髪を引かれる思いで仕事に出かけ、早引けさせてくださいとまたもや上司に頼んだら、専務に直接言えと言われた。携帯で専務に電話をしたら「そういう理由で早引けは認められない、そういう気持ちだったらウチで働いてもらうわけにはいかない」と言われた。そして、給料は出せないとも。

それはそうだろう。でもそれでもかまわなかった。朝の餌箱掃除だけ終え、脱兎のごとく帰宅。そして凧太郎を病院に連れて行った。

血液検査の結果、炎症反応の数値が、この前の胃炎の時と同じで高い(下がっていない)。キツイ胃腸障害という診断だった。

どういうことが原因でこうなるのかと聞いたら、ストレス、寄生虫、食事(拾い食いを含む)、伝染病、腫瘍などいろいろあるということだった。下血は止めた方がいいという判断で、注射とお薬。お薬はパセトシンという名前。

牧場で今日の早引きは怒られたけど、それとは別に、翌日は一〇日ぶりほどに休みを貰えることになった。お陰で凧とゆっくり過ごせたが、だんだんと牧場勤めに対する私のストレスが頭をもたげてきた。

朝の八時から二時までの一日四時間労働だが、清掃の仕事は案外キツイ。勤め始めた一月、二月はそこそこ休みの入った勤務だったが、三月に入ってからどういうわけか休み無しの連続勤務。おまけに勤務地も変えられ、自宅から遠くなっていた。休憩時間もほとんどない。

箸をきつく握り過ぎた結果の「ハネ指」も酷くなるし、体にもキツイ。牛はかわいいが、埃だらけになる毎日がだんだんとしんどくなってきていた。おまけに変わった勤務地の牧場には、真横に高圧線の鉄塔がある。早期胃がん経験者としては、電磁波には精神的なアレルギー。以前住んでいたところの傍にもあったのだ。

三月一八日、凧は血の混じった液体を吐いた。私は血が引いた。このままどんどん悪くなったらどうしよう。お医者さんに電話をしたら、様子をみてくださとのこと。吐いたのはそれ一回だけだったけど、私の決意は固まった。仕事を辞めよう。そして後先は考えず、翌日には退職を願い出、その日から失業者となった。

気分も軽く帰宅して「かあちゃん、お仕事辞めたしな。ずっと一緒にいるしな」と凧太郎に告げた。凧太郎はめきめきと元気を取り戻していった。なんだったんだろー。それに反し私はしばらくカラダがしんどくて、凧の世話以外、何もする気がおきなかった。

知らず知らず溜め込んでしまったストレスを彼は感知していたのだろうか。そして病気になるのか。それは謎だが、とにかく凧は元気になった。私も四月の声を聞くこ

ろには少しだけ元気になった。そのころには、日ごとに暖かくなる太陽のおかげか、畑の草も庭の草も元気が余って、目を覆いたくなるほどになっていた。思うにカラダがしんどかったので、庭の世話も畑の世話もまったくできていなかったのだ。

凧太郎の病気は、「かあちゃんにはその仕事はあわない、早く辞めて」というサインだったのかもしれない。何はともあれ、凧太郎ともども私も元気になって、めでたしめでたし。



「ダーか？ ダーだ！」

牧場を辞めて、凧太郎も元気になり、その母も元気になってきた四月のある日、お腹を撫でてやっていたら、何やら黒い点が見えたような気がした。老眼に忍び寄りられて細かいものが非常に見えにくい今日このごろ。

メガネをはずしてよくみたら、もしかあやしい、あやしい、とってもあやしい！この時、時刻は午後十時。

毛をかき分け、じっくり見たら白い肌についている。手でつまんだら動いた。つまんだモノをじっくり観察、これはきつとダーに違いない。ダーを見るのは初めてなので、早速ネットでダー検索、姿カタチが一致。間違はなくダーだ。うわわ。

ワン子にダー付着、その対策経験のない母は思いついた。ダーは水につけたら溺れるに違いない。ならば凧太郎をお風呂に入れよう。早速実行。凧太郎のお風呂専用バケツにドボン。

「えーお湯やなー。気持ちええなー」凧をお風呂に入れる時は、毎回そうささやき、お風呂好きになるように洗脳している。タオルで拭いてやり、ドライヤーで乾かしながら、きつとダーはとれただろうと嬉々として見たが、まだ張り付いている。

手でつまんだり、セロテープを皮膚に貼りつけて取れないかと試したが埒があかない。五匹以上数えてから、乾かすのを途中でやめ、私もお風呂の準備。今度は凧太郎を抱いて、一緒にどぼん。

ニンゲンのお風呂が初体験の凧太郎は暴れた。お湯の温度も私用の四十度設定だったので熱かったのかもしれない。凧を洗う時は設定温度最低の三七度。それでも熱いかもしれない。

母の皮膚には凧の爪であちこち赤い筋ができてきた。暴れる暴れる。猫の引っかき傷

よりはウンとマシだが。ちなみに、昔飼っていたネコの大亮と一緒にお風呂に入った時は、「絶対ちゃんと抱いているから、爪たてたらアカン」と言い聞かせた結果、おとなしく抱かれて暴れることもなく、引っかくこともなかった。

凧太郎は絶対に手を離さないと言っても、鼻で哀しげに鳴き、暴れる。そして、お尻からあぶくを出した。ぶくぶくぶく。一瞬みつめる。一瞬笑える。次の瞬間、泡がはじけ、二オイが。くさー。凧太郎、初体験のお風呂でオナラをこく。

理由はともあれ、せっかく一緒に入ったお風呂。一人と一匹がお風呂でゆっくり、ゆったり、と絵に描いたようなことも少しは経験してみたかった。けれど、暴れるは、オナラはするは。

十分毛の奥までお湯が行き渡り、きつとダーは離れただろうと思ったのだが、乾かしている時に見たら、まだついている。皮膚に噛みついてるダーはお風呂ぐらいで離れてくれないみたいだ。深夜になってしまった。

結局、翌日動物のお医者さんに電話で聞いたら、連れて行く事になった。次から次といろいろ起ころ。

お医者さんでの処方はフロントラインと、いうお薬のスポット塗布。その薬は四八時間以内に効果を発揮してくるそうなので、お医者さんから帰ってきた時点ではまだ効果を発揮していない。

お医者さんで教えてもらったことは、散歩をする時も草むらを歩かせないよつにということだった。草むらの中で、ダーは獲物を待ち伏せ、通りかかった獲物に飛びつき食らいつくそうだ。でもフロントラインという予防薬さえつけていたらそんなに心配はいらないということだ。予防薬をきちんとつけていたら、たとえダーがついて血を吸っ

ても、死んで落ちていくそつだ。

お医者さんから帰ってきて、お薬もつけてもらい、安心したものだから散歩にも行った。その後、凧のカラダを調べてみたら、なんと、お医者さんで見たより、たくさんダニがついていた。コワイほどついていた。それもキンタマのカワに手中してついていた。ひよっとしたらさっきの散歩でまたついたのかもしれない。ごめんな凧太郎、かあちゃんを許して。里山ではワンも飼い主も大変だ。

薬の効果を待たずに、捕りたいという思いが突き上げてきた。かさぶたをはがしたい心境にかなり似ている。凧太郎のキンタマに貼りついているダニをつまんだ。ダニだけうまくつまむとこができず、カワも一緒に爪でつまんでしまった。凧太郎はキャンと鳴いた。急所ゆえに痛いのだろうか。ダニを捕ると皮膚にうつすらと血。捕らない方がいいのかもしれないが、見えるものは捕りたい。十三匹捕獲。ダニは捕った尻からガムテープにくっつけた。全部捕りきりたかったけど、キンタマのカワも赤くなってきた。凧も痛いのだろうか、捕らせてくれなくなつた。気の毒な凧太郎。

翌日、カラダを見たらオチンチンより上で十匹。タマタマ付近に三匹。きのうのタマタマダニ退治で痛い目をさせたので警戒している。よほど痛かったのかもしれない。今日はカラダをよじって、何としてもキンタマにだけは触らせない覚悟のようだ。捕らせてくれない。しょうがないので凧をじっと見ていたら、突然カラダを噛み噛みする。ものすごく痒そうなので、凧が噛むのをやめてからその毛を分けて見ると、やはりダニがいた。タマタマ以外なら触らせてくれたのでつまんで捕った。なんだか私も頬やおデコが痒くなってきたのは気のせいかな。

この事件以降、凧は長らくタマタマに触れることを異常に嫌った。それはそつだ

ろつ。母はダニに異常に神経質になった。それもそつだろつ。

後日、庭に置いてある凧太郎の水飲み皿に何やら赤黒い小さなモノが浮いている。よく見たらダニが水泳をしていた。ダニは水に溺れず泳げる！ぞくつ。

八月、毎年恒例の「鮎の会」という催しがある。かつてサラリーウーマンをしていた時代に知り合った人たちと、一年に一度集うのだ。鮎を釣ってくれる人がいる、焼いてくれる人がいる、天麩羅を揚げてくれる人がいる。そしてバーベキューもある。

この「鮎の会」は、滋賀県は安曇川の川辺で行う。今年は、凧太郎を伴って参加した。

参加する前に、焼けた石や砂で、犬が足の裏を火傷するということを読んだものだから、私は川辺の焼けた石で凧太郎が火傷をしては大変と犬用の靴を買った。これが高い。母は財布がづらい。けれど、川原で凧太郎に靴をはかせ、散歩としゃれこみたかった。しかし、凧太郎は靴を履かせたしりから脱ぐ。履かせたら脱ぐ、履かせたら脱ぐの繰り返しを何回繰り返しただろう。

私は、バーベキューの手伝いもせず、靴を履かせることに執着していた。この集いでは、働かざるもの食うべからずという掟があるのだが。かなりの時間をくい、やっと四本の足に履かせ終えた。そのころには食べ物の準備は終わっていた。そして、川原の石を触ってみたら大して熱くない。とほほ。

でもやっとな履かせたのだからと、靴を履かせたまま川辺に連れて行った。そしてものの五分もたたないうちに、苦労して履かせた靴を脱がせ、そろそろと川の中にいざなったのである。

私が先に川の中に入り、だんだんと少し深めるところに連れて行く。ミニチュア・ダックスにとっては、浅いところでも、すぐ足のつかない深い川となる。そして、足がつかなくなった瞬間、凧太郎は泳いだ。犬掻きで泳いだ。誰に教わるでもなく、足がつかなくなったその瞬間、本能が泳がせる。

感動。

本能で泳いでいるが、岸への方向も本能が知っているようで、岸へと方向を変えて、初めての遊泳はあっという間に終わった。

しかし、感動を再度味わいたい私は、またもや川の中に凧太郎をいざなった。泳ぐ。犬ってスゴいな。胸に熱いものがこみあがりうるつると目頭が熱くなった母である。

ちなみにこの日、凧太郎は小さいヒトたちに大人気。名前を教える時に「勇氣凧々凧太郎」と告げたり、翌年出会った時にもちゃんと覚えていてもらえた。

## 27 大豆とセーターとレインコート

枝豆をからからにしたものが大豆である。私は、味噌を作るために大豆を少し作っている。

晩秋の一日、縁側で大豆のさやを剥いて、ザルに最初の三粒をのせた。次の瞬間、ザルを見たら「粒しかない。反射的に傍にいた凧太郎のアタマをペシッと軽く叩きながら」あんた、そんなもん食べたらあかんやろ」。

途端に二粒ぼろっと吐き出した。アタマをペシッ。叩いた瞬間にぼろっと出す。その絶妙のタイミング。大爆笑。

機械仕掛けのおもちゃみたいだった。

秋も深まり、寒さも日一日と厳しくなってきた。私は、夏から運送関係のパートに就くことができていた。私が仕事に行っている間、昼から夕方まで、ひとり留守番の凧太郎が寒かろうとセーターを買ってやった。前足二本に袖を通すという作業。またもや着せるのに「苦労。最初の一年の間に、何かを着せるということに馴らせなかったせいか、いやがる。それでもなんとか着せた。これが意外にかわいい。洋服を着せるというのは趣味ではなかったけれど、なるほどかわいい。寒さ対策としてもいい。

「こんなもんで着せられてすかん



かわいいとほめまくった。ところが凧太郎は「洋服がお嫌い」だった。苦労して着せて、仕事から帰ってきたら、どうして脱いだのか、前足をきれいに抜いて、セーターは腹巻状態だ。その姿に大爆笑。思わず「あんたどうして脱いだん」と聞いてしまった。その後、セーターを見るだけで逃げ出し、そうなたら捕まえるのはほぼ不可能。母はあきらめた。

ある日、買い物に行ったホームセンターで、たまたまワンのレインコートが安売りしていた。雨の日は冷たかろうと買ってやった。このころは、何があっても、散歩だけは毎日連れて行ってやらねばと固く思っていたのだ。そのレインコートも着せるのに「苦労だったが、雨の日、母は嬉々としてレインコートを着せた凧太郎を伴い散歩に出かけた。



はっぴりいって迷惑やー！



そしてシッコ。書いてある通りに着せただは  
ずだし、書いてある通りだとシッコはちゃ  
んと外に出るはずだった。シッコをしだし  
た凧の傍にしゃがみ、地面に顔をすりつけ  
んばかりに覗きこみ観察したら、シッコ  
は外に出てこない。レインコートの中に放  
出された。ありゃあ。凧太郎のお腹はシッコ  
まみれとなった。当然帰宅後、即お風呂。母  
は凧太郎に何かを着せるということをやめ  
た。そして、雨の日の散歩もやめた。「今日は  
雨やし、散歩なし！」

その後、雨が続いて散歩ができない日々が  
続くことがあった。過保護のおばかな母は、  
凧太郎かわいさの余り、桃ちゃんの家で電話  
をした。そして、傘をさし、凧太郎を懐に抱  
き、遊びに行かせてもらおうということをし  
めてしまった。嗚呼。

今日と昨日と、かあちゃんはお休みだ。休  
みの前夜、布団に入る時「ええか凧太郎、明  
日はかあちゃんお休みやし、絶対に朝起こし  
たらあかんで」といつも言う。お利口なボク  
は、かあちゃんが起きるまで待っている。

前に間違っただけで起きて起こすことがあった。  
「お休みやし起こしたらアカンって言ったや  
ろー」と言っただけで、また布団の中にもぐりこん  
でしまい、その日はずっと機嫌が悪い。ボク  
は学習能力があるから、そういう失敗は二、  
三度しかしていない。いや五、六度かもしれないが、とにかく今ではしていない。

休みの日は、起きたら一番に「今日、かあち  
ゃんはお休みやし、ずっと一緒にいられる  
し、ええやろ凧太郎」といつも言う。

ボクは何度そのコトバに騙されただろう。  
「一緒に遊べると期待するのだが、大抵期待は  
裏切られる。でも、朝の散歩はゆっくりでボ  
クの道草も許してくれるし、ガールフレン  
ドの桃ちゃんともたくさん遊ばせてくれる。  
それだけは嬉しい。

そして、今日も期待は裏切られた(昨日も  
裏切られている)。かあちゃんは言ったのだ、  
「さあ、今日こそテーブルの上を片付けるわ  
な」。

掛け声ばかりで、ちっとも始めない。見て  
いたら、テーブルはそっこのだけで、パソコン  
の置いてあるあたりをボケーと眺めている。  
ボクにとってパソコンは嫉妬の対象だ。か  
あちゃんはそれをいじりはじめると「お仕  
事」と言っただけで、ボクがかわいらしい声を出そ  
うが、吠えようが相手をしてくれない。「お  
仕事」と言っただけで、ボクは仕事ではないと知って  
いるのだ。かあちゃんは、きつとそのパソコ  
ンで遊んでいるだけだ。このころでは、ボク  
もかわいらしい声を出さず無駄だとあき

らめて、ストーブの前で寝ていることにしている。

かあちゃんは、テーブルの上には手をつけず、パソコンの乗っていた重たそうな机を動かした。やっぱり遊んでもらえない。それから筆筒なんかも動かした。家の中をあっちからこっちと往復している。

やっとボクの相手をしてくれたのは夕方遅く。冷たい風がビュービュー吹く中を散歩に連れていってくれたけど、寒いっただけりゃしない。でも、連れていってくれただけマシだと思おう。今日遊んでくれたのは朝の散歩と夕方の散歩だけ。もちろん大好きな桃ちゃんのところには連れていってくれたけど。

ボクはそれだけではつまらないのだ。かあちゃんとも遊びたいのだ。でも、かあちゃんがずっと家にいて、一緒にいられるのは確かに嬉しい。あんなかあちゃんでも、なんか安心なんだな。

ところで、今日もかあちゃんはテーブルの上を片付けなかった。ほんとにいつになっただけ片付けるのだらう。きつとイヤなことを後回し、後回しにしているんだ。ほんまにしょうがないかあちゃんだ。

## 29. 猿

久しぶりに猿が出た。

めずらしく凧太郎より先に私が気付いた。台所で視野をかすめた窓外に動くもの、目を上げたら、それは猿。

この時、私は最近ちょっとはまっている天然酵母パン作りのための準備で、リンゴをすりおろしていた。それをすぐさま中断し、庭に出た。凧太郎もついて来た。彼は、素早くニオイを察知し、吠え、庭の端に走る。私は凧太郎に「おいで」と声をかけ、彼を小脇に抱え外に出る。

「ウー！、ウー！、ウー！」と腹の底から声を枯らすほどに怒鳴り、走る。腕の中の凧太郎もそれに合わせるように吠える。畑にいる猿に迫った。猿は平然と何かを食らっていたが、一人と二匹の「ウー」「ワンワン」の二重唱で肉薄するほど迫った時に、逃げた。気合勝ちだ。

猿もしたたかなもので、女子どもと見るとちょっとやさっとでは逃げない。そこを気合で勝負すれば勝てる、というのがこの地に来てからの経験だ。ひるんではいけない。びびってもいけない。あくまでも本気の強気で迫る。

ところで聞いた話だが、犬は、その本能のまかせるまま、どこまでも猿を追い続けるぞうだ。すると、結果的に知らぬ間に山に連れこまれ、いつのまにか猿に取り囲まれ、やっつけられ、帰ってこないということがあつた。凧太郎のような小型犬は、猿に抱えられ、消えてしまふということがあつたという話も聞いた。

そついつことを聞いているので、愛犬大事の私は、猿が出た時は、凧を小脇に抱えて応戦するのだ。彼の吠える声は、大袈裟でなく、大型犬なみの迫力がある。カラダは小さいが、

声だけは大きく、立派な猿対策となる。

「ここいらのルールで、猿を見たら、すぐさま追わなめかん(追い払う)と教えられている。幸い、私の小さな畑は被害に遭っていないかったが、猿はまた戻ってくるかもしれない。猿に盗られてはかなわんと思ひ、畑からニンジンを書いて(収穫して)、泥を落とし、玄関前にとりあえず置いた。」ふん、盗られるものか」。ささやかな勝利感。

ホッとしたり、リンゴのことを思い出し、置いたニンジンのことを忘れて、家に入ってしまった。

そして、ニンジンのことを「あっ」と思い出してあわてて玄関に出たら、ニンジンはそのにはなかった。門柱の上や、そこかしこにニンジンの皮の食べ残しだけがあった。ものすこしい敗北感。

猿が、我が家の玄関先でニンジンを食らっている間、凧太郎は猿退治の褒美にももらったガムに集中していたのか、何も気がつかなかった。そして、一緒に庭に出たら、尾をビュンビュン振って、猿が食い散らかした残りのニンジンめがけて走って行った。嬉しそうに食いまくる。はあー。悔しいやら、情けないやら。

「生のニンジンも仰山食べたからお腹をこわす」と本に書いてあったので、怒ってみるが、逃げては食う。ニンジン大好きな凧太郎は言う事を聞かない。ちなみに生野菜をいっぱい食べても、お腹をこわしたことはない。

猛烈な勢いで悔しさが湧いてきた。めっちゃくちゃ悔しい。何より自分が悔しい。「瞬でも勝利感に酔った後だけに、悔しいさも倍増。猿のためにニンジンを書いて、泥を落とし洗ってやったみたいなものだ。私のニンジンは全てなくなった。

ささやかな勝利感を得た気の緩みから、玄

関前にニンジンを書いた、猿に「さあ食ってくれ」とばかりに書いてしまった私が悪い。そうだ、私が悪いのだ。自分の手落ちがひたすら悔しい。勝利感の後だけに感情の落差が激しい。

これを書いている最中も、目の前の窓外を猿が闊歩している。屋根にいる気配もある。凧太郎は、ニンジンの残りが食べたいので、外に出せと鼻を鳴らしている。私は力が抜けている。

感情というものはニンゲンの心を疲れさせるものだと改めて思う。

## 08 アマガエルのシッコ

アマガエルさんが出てきた。かあちゃんが「凜、アマガエルさんやで」と言った。かあちゃんはアマガエルに「おいで」と言っって手を差し出した。アマガエルが、かあちゃんの手の上に乗った。うーん、かあちゃんとアマガエルさんはトモダチなのかな？

ボクは動いているものはちょっと噛みたい。以前カメムシを噛んだ時は、その余りのニオイにのけぞった。のけぞるボクを見て、かあちゃんに笑われた。その前に「それだけは噛んだらアカン」と言われていたのだけだ。

噛んだ後は、かあちゃんにつかまれて口のニオイを嗅がれ「くさく」と言われ、水道の蛇口に口を持っていかれてジャブジャブ洗われるは、それだけでは済まず、ミカンの皮を塗りたくられるは、まいったことがあった。

アマガエルさんはちょっとくらい噛んでも、また元気に飛び跳ねるから、ボクの遊び相手としてはなかなか面白い。で、かあちゃんの手のひらを狙って、カエルさんをあま噛み。

そしたら、「凜、噛んだらアカンやろ」と、かあちゃんに怒られてしまった。そしてカエルさんはボクの口の中でシッコをした。かあちゃんの手にもシッコがついた。ボクはその後カエルさんを追いかけて遊んでいた。それで、なんかニオイ付けをしたくなって、カエルさんにすりすりしていたら、またかあちゃんに怒られた。

「何のニオイつけてんの！」。慌てて起きたら、カエルさんが石の間に入ろうとしたけど、また捕まえた。そこにかあちゃんがつつかとやってきて、ボクが捕まえられた。カエルさんはボクの口からポロっと出て、元気に飛んでいった。かあちゃんは「良かった、カエルさんでっつものって」と言った。

ボクはその後、しばらくシャックリが出ていた。カエルさんのシッコのせいだろうか。

母である。凜太郎は、以前死んだミミズにすりすりして臭くなった。そのニオイは、ほとんど生ゴミのニオイ。私はオエっとなつた。またある時は家を脱走して、帰ってきたのをつかまえたら、鶏糞のニオイがカラダ中から漂っていた。鶏糞のニオイはほとんどウンチのかおり。またもやオエっとなつた。ものすごく臭い。いずれの場合もすぐにお風呂に入れた。クサイものにカラダを擦りつけるのだけは、お願いだからやめて欲しいと母は切に願う。そして、かあちゃんの仕事を増やさないでくれたまえ。



桃ちゃんのお母さんの娘さん家族が、ゴールデンウィークのお休みを利用して田植えのお手伝いにワンと一緒に里帰り。

ボクは、仕事から帰ってきた母ちゃんを引っ張って、桃ちゃんの家を目指していた。夕方の散歩はかあちゃんが早く帰ってきた時だけしか行けないから、ボクはルンルン。かあちゃんに行く道、「今日は凜が怖いプリンママと、桜ちゃんやマリリンちゃんが帰ってきたはる。そやけど、もう晩ご飯食の時間やし、桃ちゃんには会えへんかもしれへんで」と言っていた。けど、ボクに聞く耳はなかった。ボクのアタマの中は桃ちゃんではない。

桃ちゃんの家の上まで来たら、庭で音が聞こえた。ボクは、ますますかあちゃんを引っ張った。桃ちゃんのお母さんの匂いだ。桃ちゃんは庭にいなかったけれど、ボクはお母さんに会えるだけでも、いつだって嬉しい。お母さんは、すぐに桃ちゃんを庭に出してくれた。お母さんは「桜ちゃんも一緒に遊ぶかなー」と言っていたけど、やはりボクには聞く耳がない。ボクのアタマの中は桃ちゃんではない。

いつもならボクが行くと、すぐに桃ちゃんがボクのニオイや声で、ボクに呼びかけをしてくれるのだ。今日はそれが無い。なんかおかしいなあと思っていたけど、桃ちゃんが出てきてくれたら、そんなことはすぐに忘れた。

ボクと桃ちゃんは、いつものように庭で遊んでいた。ボクが桃ちゃんを追いかけて、お母さんの家の裏口に行ったら、中からワンの声が。ドキッ。思い出したぞ、この声はプリンママだ。さっきからかあちゃんが何か言っていたのは、このことだったのか。でも、

まだ大丈夫、こっちに来ない。外にいるのはボクと桃ちゃんだけだ、と安心してた。

ところが、ボクが来たのを知ったプリンママの人間のお母さんや、桜ちゃんの人間のお母さんが、マリリンちゃんや桜ちゃんを抱っこして出てきてくれた。ボクに気をつかっていた。プリンママは家の中に閉じ込めたままだった。けど、ボクはマリリンちゃんに、いきなり吠えられた。ボクの心に恐怖が走った。マリリンちゃんにはプリンママのニオイがする。ボクの尾は、勝手にお尻の下に巻き込まれてしまった。そして、おどおどと少し走った。

「こんな姿を桃ちゃんに見られたくないのに。でもカラダは言うコトを聞いてくれない。かあちゃんもついてきてくれない。

かあちゃんは「凜こわいのか？」と笑いながら言う。そしてボクを抱いて、抱かれたマリリンちゃんの顔の傍に持っていた。うえーん、まだこわいよー。マリリンちゃんのお母さんが、「プリンのニオイがするから、コワイのかしら」と言っていた。そうなんだボクはプリンママがとにかく怖い。

今度は桜ちゃんの傍に顔を近づけられた。桜ちゃんは「ううっ」と唸った。ボクはかあちゃんの腕の中のけぞった。

ボクはマリリンちゃんのお母さんに抱いてもらった。ちょっと安心。その次はマリリンちゃんのお母さんの娘さん。かあちゃんはマリリンちゃんを抱いていた。それを見てもうちよっと安心。

今度は桜ちゃんのお母さんが桜ちゃんを右腕に抱いたまま、ボクを左腕に抱いてくれた。ボクは前に桜ちゃんを追い掛け回したことがある。それで嫌われているのかも知れない。桜ちゃんは手足をつっぱって、できるだけボクから離れようとす。そんなに嫌わないで欲しいな。それを見てかあちゃんやお母さんたちは、にぎやかに笑って

いた。  
よく見るとワンもニンゲンもオナナだからだ。オトコはボクだけだということに、この時初めて気がついた。なんか圧倒されてしまった。

桜ちゃんのお母さんや、マリンちゃんのお母さんが、「凜太郎くんは、目が大きくてかわいいなー、オトコらしくなったのところが」と誉めてくれていた。かあちゃんはボクが誉められると、いつも目尻を下げて顔中で嬉しそうな顔をする。ほんまにアホや。

ボクがこんなにドキドキしているのに、そのことに気がついてよと思うのだが、思うだけ無駄だとわかってきたので、最近はあきらめてもいる。

最後に、桃ちゃんの傍に連れていってもらい、桃ちゃんに顔を近づけて、桃ちゃんのお母さんにも撫でてもらい、なんとなくほっ。こっつして、ボクのハーレムな時間は終わった。ああ疲れた。

久しぶりに会った桜ちゃんとマリンちゃん。桜ちゃんは前は全身がクリーム色で、マリンちゃんは薄いグリーン系の毛並だった。

今日は二匹とも、薄い茶色の毛が少し出てきていた。そしてマリンちゃんは鼻の頭の上が黒くなって、愛嬌のある美人に変身していた。桃ちゃんは二匹に比べて、お腹の部分が毛が長くて白っぽい。全身は明るい茶色。桃ちゃんの額には「筋濃い、こげ茶色の毛が立っている。これをベッカムとみなは呼んでいる。凜太郎は尾の付け根あたりに黒い毛が増えている。」

桜ちゃん

マリンちゃん



桃ちゃん姉妹は二〇〇三年五月二〇日生まれ、凜太郎は二八日生まれ、みんなもつすぐ満二年になる。凜太郎のお姉さんのマロンちゃんにもベッカムの毛があった。耳の毛が長く、それは美しいソバージュだったが、今はストレートになっている。桃ちゃんのお尻の飾り毛も、お風呂上りで濡れていると美しいソバージュだ。

ベッカムの毛のあるワンは、その毛が消えるころに毛並みが安定すると聞いている。ベッカムの毛がそれと見えなくても、二年

から三年の間は毛並みが微妙に変化するらしい。

今は夏毛になりかわる時期か、毎日毎日たくさん毛が抜ける。これがニンゲンだったら、ハゲにならないかと心配になるくらい毛が抜ける。この毛の抜け変わりの終わりがころにまた少し違う毛並みが登場するだろうか？

それぞれ満二年。次に会う時の毛並みの変化が楽しみだ。みな美しく、かわいいワソ。

ところで、今日の凜太郎は、桜ちゃんのお母さんに抱かれていた時、なんとも情けない目をしていた。桜ちゃんに手足でつっぱられショックを受けていたのだろうか。借りてきた猫のような凜太郎を見るのは、母として大変面白い。そういうしおらしさを、この母と二人の時でも見せて欲しいものだ。

家に帰った凜太郎は、フンフンと鼻を鳴らし、パソコンに向かう私に聞こえるようにクーンクーンと鳴いていた。

どんな格好で鳴いているのかと探して見たら、一度目は、炬燵の中で、二度目はストーブの前でオッサンスタイルで横になったまま鳴いていた。ズボラをかまし、どうせこちらを見ないだろうと高をくくって、鳴き声だけで要求を通そうとしているのか？

パソコンに向かったが最後、「仕事」といつわり、凜を省みないことが常となっている。そういう状態なので、「フン」いうズボラ鳴きを習得したのかもしれない。

恥ずかしながら、凜太郎が「フン」いう鳴き方をする時、どうして欲しいのが、まだまだわからない。抱いてやっても降りたという。耳掃除をして欲しいのかと思いつき「耳の掃除をしよ」と言ったら、膝の上に乗ってきた。耳掃除の要求だったのかと思ったが、済んで

なお鳴く。結局は遊びたかっただけだ。ポール遊びで納得したかと思っただが、まだ足らず、母の服の袖をひとしきり噛んで(キック噛むわけではなく、母の腕を犬と見たてて遊んでいるようだ)やっと納得したようだった。

手のかかる子だ。しかし、「かあちゃんお仕事、凜ハウス」と言ったら、ちゃんと一人でハウスに入り、おとなしく留守番もしてくれるいい子でもある。といつもながら親ばかりで終わってしまう。

私がこの地に越してきたのは二〇〇二年六月四日。ほどなく体験した梅雨は「えっ、こんなに寒いのか？」というほどだった。まだ開けきっていないダンボールの中からセーターを探し出して着た。慌てて石油ストーブも買いに行った。それほど寒いと感じた。夏の間も、ほとんど長袖のパジャマで過ごした。凧太郎と暮らした最初の夏は、去年より暑いかもと思うくらいだったが、暑くて寝られないというようなことは、一度もなかった。そして、三度目の夏はあまりに暑い。地球温暖化の影響が、いよいよ寒冷地にもやってきたのか。今日は六月二十八日。凧太郎は満二歳と一カ月、二度目の夏体験。

夜半は冷え込むので、凧太郎と一つベッドで共に寝るといふ悪しき習慣を崩すこともせず、昨秋からずっと仲良く寝る日が続いてきたが、今夏はあまりに暑い。「ここ五日ほどめっちゃくちゃに暑い。とうとう昨日、炬燵を片付けた。梅雨どきの寒い日に備えて、片付けないままだったのだが、今年はまだ必要ないと判断。私の家では、炬燵もストーブも片付けられている時間の方が短い。

三日前の夜、とうとう暑さに負け、生きた炬燵が煩わしくなってしまった身勝手な母。「あんた勝手に寝よし」と言い、凧太郎を下に置いたまま、自分だけベッドに入って眠りに入ろうとした。すると、せつなさそうにクーンクーンとしつこく鳴き続ける。鳴かれると寝られない。どうして欲しいのかわからず、シッコかと思ひ連れていっても違う。抱いてやったら鳴くのを止めた。このクソ暑い夜でも私にくっついていたら、自分も暑いの良い場所に移動するのが常なのだが、寝しなはくっついていたいらしい。そうか、寝しなはかあちゃんにくっついて寝てほしいの

だな、暑いけれど、まっいいか、そう思った三日前。

そして昨夜も暑かったけれど、最初はくっついて寝ていた。夜中にクーンクーンと鳴く。鳴いても私が起きないので舐め始めた。今夜はシッコだろうと連れていったら違う。またベッドに連れ戻り、私は眠りに入ったが、しばらくしたら、また鳴くは舐めるは、なんとしても私を起こす努力をする。かわいい声で鳴くので怒ることもできず、どうして欲しいのかもわからない。何より私は眠い。

だいたいベッドから降ろすと、上げてくれ上げてくれとうるさいヤツなので、私の選択肢の中には、降ろすということは入っていなかった。が、あまりにうるさく(と言ってもかわいい小さな声で、静かに鳴いているだけなのだが、しつこい)私の睡眠の妨げになること甚だしく、ついにベッドから降りろし、「オシッコやったら勝手に行ってきて」と言った。帰って来たらまた上げてくれと鳴くやろなーと夢つつつで思いつつ。

ところが、ついに鳴くこともなく、私はその後、朝までぐっすり眠ることができた。結局、凧太郎も暑くてベッドから降り、私から離れて、一人にいや一匹になりたかったようだ。私が目覚めた時、彼は床の間に鎮座していた。

ちなみに凧太郎は、ベッドに飛び乗ることは出来ない。ついこの前までは降りることも出来なかったのだが、最近は一人で降りている。ちょっとした勇気が足りなかっただけのようだ。一人ベッドに残しておくに勝手に降りる。だから、降りたい時は勝手に降りてくれと思うのだけど、これまでは降ろしてもらおうのが常となっており、勝手に降りてはいけないと思ひ込んでいるのか、起す。これみな過保護に甘やかして育てた母

の不徳の致すところではあるのだけれど、夜中に起こすのだけは堪忍してくれ、どうか勝手に飛び降りてくれと切に思う母である。

凧太郎は鼻のアタマにホコリや砂をくっつけている時がよくある。本人は気にならないのか、つけたままでウロウロしている。犬というものは動いているものしか感知できず、動いていないものは全く感知できないということを知ったことがある。自分の鼻のアタマに何かついていたら感覚でわかりそうなものだと思うのだが。見えないのかな、気にならないのかな、感じないのかなと、かねがね不思議に思っていた。

今夜の食事時、彼の好物のご飯粒が鼻のアタマについているのを母は目撃した。彼はお米が大好きだ。好物を何としても食べたかったようで、一生懸命にご飯粒を鼻から取るうとしていた。

しかし、手がとどかない。

ミニチュアダックスはご存知のように手が短い。その短い手を必死に動かし、鼻のアタマのご飯粒を取ろうとしているのだが、いかんせん届かない。自分の鼻に自分の手が届かないというミニチュアダックスの哀しい業を母は見たのだ。

でも、その仕草がめっちゃかわいく面白い。ひょっとしたら、どのダックスも手が届かないのではなく、凧太郎の長くてデカイカオがあだとなっているだけかもしれない。

こうして、鼻のアタマについてしまったものは感知できているはずだと母は思った。ただ取りたくても取れないのが実情ではないかと。

今日、ボクの家には桃ちゃんがやってきた。ボクは、こんなに長いこと桃ちゃんと一緒にいたのは初めてだ。八時間半も一緒にいた。

桃ちゃんは最初、どうしてここに連れてこられたのという感じで、ずっと門の前にいた。でもしばらくしたら、庭の探検を始めた。探検よりも出口を探していたのかもしれない。ボクの家はぐるっと塀で囲まれている。どこからも出られなくなっている。

そのうち探検をやめて、ボクと追いかけてこしてくれた。ボクは家の中と庭とを、ボク専用のスイングドアで自由に出入りできるのだけど、桃ちゃんはドアの音が怖いみたいで出入りができない。そのうちかあちゃんが何やら大きな音を立て始めたので、その音も恐かったみたいだ。ボクはかあちゃんが何をしているのか見に行ったり、桃ちゃんのところに行ったり、大丈夫だよと言ったり、桃ちゃんとかあちゃんの間を行ったり来たりして、気を使い、体を使い。なかなか大変なんだ。

そのうち桃ちゃんはボクの登れない台の上にながってしまった。そこからだと網戸を通して表がよく見える。ボクが懇願しても桃ちゃんは降りてきてくれない。かあちゃんは庭にいてボクを上げてくれない。ボクが情けない声を出していたら、見に来てくれて、台の上を上げてくれたけれど、すぐに出ていってしまう。そしたらボクはまたかあちゃんの傍にいなきゃ、というボクの使命に駆り立てられて降りてしまい、かあちゃんの傍に行く。するとかあちゃんは、「桃ちゃんは、お母さんが帰ってきたきはるまで淋しいから傍にいてあげ」と言う。で、ボクはまた桃ちゃんの傍に行くのだけれど、上に上がれない。

桃ちゃんは高いところでも平気で飛びあ

がれるから、ボクはとても羨ましい。でも、ひとつ新しい発見があった。表で音がしたら、一緒にワンワン吠えてかあちゃんに知らせる。その時、ボクは庭に飛び出して、音の正体を確かめに行くのだけれど、桃ちゃんは家の奥に行ってしまう。ワンワン吠えていた。桃ちゃんはボクより強いと思っていたけれど、案外怖がり屋さんだった。そういうことを今日知った。

ボクにとっては忙しい一日だったよ。かあちゃんと桃ちゃんの間をいったりきたりの一日だったような気がする。ああ疲れた。

ほんまに疲れたし



「昨日、仕事から帰ってきたら、我が愛する凧太郎が震えていた。おっ、今日はかあちゃんの家がそんなに嬉しいのかと思いきや、いつまでたっても震えているので、やっと寒いから震えているということに考えが結びついた。なるほど母もさぶい。」

私のいでたちは、トレーナーに袖なしちゃんこ。そのちゃんちゃんこの中に凧太郎を入れ、しばらく抱いてやっていたら、やっと震えがおさまった。日中は温かいので縁側のサークルに入れて留守番をさせていたのだが、夕方から冷え込む。ガラス窓の傍では、さぞ寒かったのだろう。

昨日、仕事に行く前に、しまってた炬燵布団を天日干し、ホットカーペットを敷き、炬燵をしたらえた。このホットカーペットは畳の下からの冷気対策のためであり、節約のため、電源を入れることはない。

仕事から帰ってきて、凧太郎をサークルから出してやり、留守番の「褒美の儀式。エイセイボウ口を五粒やる。そして私は夕飯の仕度にとりかかる。ふと凧太郎を見に行くと、炬燵布団の下から首だけ出している。そっと布団をめくったら、お腹マルだし、仰向けでくつろいでいる。なんちゅう犬やと思いつつ、その姿に微笑まずにはいられない。あいきわらずおばかな飼い主である。



ちなみに凧太郎は、シッコ、ウンチを極度に我慢している時、目の前の美味しいものに「待て」をさせられている時、遊んで欲しくてたまらない時にもカラダを震わせる。

私はかなりの柿好きである。なんとこの母にしてこの子ありか、凧太郎も柿好きである。というか柿好きになったというか。

今年が生り年か、夏には梅をたくさんいただき、秋には柿をたくさんいただいた。柿があると、ご飯の量を減らしてでも柿を食らいたい私。柿はカラダを冷やすと昔から言われており、冷え性の私は、柿を控えていた時期があった。けれども美味しいものを美味しくいただけこそではないかと、最近では、あまり控えることもなく、バリバリと食べている。熟したゆるゆるの柿ではなく、固い柿が好みだ。ちなみに干し柿も大好物だ。干し柿は消化が悪いそうで、胃切除後の正月は来年まで我慢するよにと主治医から申し渡された。翌シーズンにはOKと言われていたので、一年の我慢の後、干し柿シーズンにスーパーで見つけるや、すぐ買い求めて食べた。その時の幸せだったこと。もっとも昔のようにいいかげんに噛んで飲みこむのではなく、しっかり噛んで食べるという習慣だけは身につけた。おかげで、噛み締めて味わう幸せも手に入れた。

柿を剥き始めると、凧太郎が生唾を飲みこむ音をさせながら熱い視線を送ってくる。買った柿は一度だけで、それも五個百円といううれしい価格。他は、いただいた柿ばかりなのだが、途切れることなくデザートとして食卓にのせられる幸せ。果物は私的財政では贅沢に分類されているので、めったに買わない。今秋は、るんると至上の喜びの毎日なのである。

凧太郎の熱い視線にも応えるべく、小さく切った柿を少し皿にのせてやると、私が口に入れる前にたいらげてしまう。凧と目を合わせ「美味しいなー」と言う時の幸せ。美味しいものを分かち合う喜びが私は好きだ。そ

の相手がたとえ犬であっても、というか犬しかない。

美味しいというのは理屈ではない。口が嬉しい、カラダが嬉しい、心が嬉しい。凧太郎と美味しいものを分かち合える時間が好きだ。

いつもは、何でも少ししか貰えない凧太郎だが、今年は柿とサツマイモに限ってだけはかなりふんだんに与えられている。何に付け飽きるほど、満腹するほどに食べさせてもらえない凧太郎だが、柿だけは勝手に「馳走様をするようになり、もういらんと、私がまだ食べている最中から、そそくさと炬燵にもぐりこんで行く。

もういらぬのかなと思っていたら、もぞもぞと炬燵から這い出し、まだ食べ続けている私の膝の上に乗ってきて、もうちよっと頂戴ということになる。こらういうことが何度か続いたので、はたと思い浮かんだ。小さな凧太郎のカラダは、少量の柿で即効に冷えるのではなかるうか。炬燵でカラダを暖めて、暖まったら、また食べたいということなのではないだろうか。

こらうして毎日柿を食べ続け、ついに当たってしまふ時がきた。一口、口に入れるや顔中渋くなった。同じ柿を食べた凧太郎は、すでに飲みこんだ後、食後の舌なめずりをしてケロっとしていた。彼には渋いという味覚がないのだろうか。猿だって渋柿はほっておくのに。

ちなみに凧太郎はサツマイモも大好きだが、こちらは、かなりの量を与えても炬燵に入ろうともせず、「もっとくれー」といつまでも熱い視線を送りつつけている。そして、何につけ、最後の一口は必ず凧太郎にあげてしまう私。食いしん坊の私にとって、最後の一口はとても大事なものだだったが、人間変われば変わるものだ。

こらうして、実りの秋の恩恵と、人様のこ好



意を十分に受け、一人と一匹は幸福な食生活を送るのであった。

### 38 二度目のお正月

一人と一匹は二〇〇六年、三度目のお正月を無事迎えることができた。二〇〇五年一月、母はパート先の激務を乗りきり、凧太郎は、朝早くから夜遅くまでの、一日中の留守番に耐えた。留守番のストレスが頂点に達するころに正月となり、母は元旦から二五日まで、長期休暇となった。

我輩は凧太郎である。

ほんまに、一日中留守番はかなわんかったわ。家に帰ってきてても、ろくに相手もしてくれんとすぐに寝るし。休みの日も洗濯だけして、あとは炬燵で寝てる。家の中は埃だらけになって、ボクはクシヤミが出て困った。ま、お正月は食っちゃ寝、食っちゃ寝で、ボクも十分に食べさせてもらい、「緒に十分に寝て、なかなか良かった。もう少しちゃんと掃除してくれたら、もっとええんやけど。」

桃ちゃんのお母さんが、前に一度だけ家に来た時「凧ちゃん、足の踏み場もないな。かわいそうに。私でも、これは一日で掃除できひんわ」だって。

桃ちゃんの家はきれいで、ボクと桃ちゃんが追いかけてこをしても障害物はないんだ。でもボクの家はそこいらじゅう障害物だらけ。かあちゃんは、それから少しだけココロを入れ替えたのか、ちよっとだけマメに掃除をするようになった。でも、年末の一カ月で前よりヒドイことになっていた。

かあちゃんのアタマの中には「整理整頓」や「掃除」という項目がないのではないかと、ボクは疑っている。今年、ボクがかあちゃんに期待するのはそのことだけだ。もう少したくさん美味しいものをくれて、もう少し一緒に遊んでほしいけど、かあちゃんは、することがたくさんあるみたいだから、少しくらいは我慢してもいいかななんて、今これを書いている瞬間は思っている。でも、ボ

クはすぐに忘れるから。きっと今年もあれくれワンワン、あれしてワンワンと吠えては、怒られるんだらうな。

そっだ、もうひとつ。かあちゃんはいつも仕事に行く時、鍵をしめてから、また戻ってくる。ほとんど毎回戻ってくる。ボクは最初「ボクも連れていってもらえるのか」と期待した。でも忘れ物を取りに帰ってくるだけだとわかった時はがっかりした。けどね、大概毎日なんだ。どう思う？ 懲りないかあちゃんだ。今年はその癖も直した方がいいと思うよ。出かける前に、忘れ物のないように、ちゃんと点検してから行ってよね。外ではどうなんだらう。仕事先でも、きつと帰りしなに同じことをしているんじゃないかとボクは思っている。しっかりしてよね、かあちゃん。

そしてその母である。

ほんとに年末は忙しかった。毎夜、お風呂で居眠りをするほどに、くたびれ果てていた。凧太郎は賢く留守番をし、あまりわがままも言わず、よく我慢してくれた。

凧太郎を爺ちゃんから貰い受け、共に暮らすようになって二年半。「こうして書いてみると、いろいろと思いつく。

最初は、なんて世話の多いものを貰ってしまったのだらう。予防注射や予防薬のお金も大層かかる。おまけに育児ノイローゼきみにもなり、ちゃんと育てられるだらうかと心配したものだ。

近所の人からは「犬が来て、せいがよかったやろ(淋しくなくなったやろ)」と言われることもあったが、一人の方が気楽で良かったと思ったこともあった。

動物のお医者さんにもよくお世話になった。湿疹、耳の炎症、胃腸障害、ダニ、目の炎症。

歯の抜け替わりの時は、血を吐いたと思いだ騒ぎ、大層心配して連れて行ったこともあった。病気が治るのは手放して嬉しいが、その度に財布が軽くなって、それはそれでつらかった。

買い物に行っては、早く帰ってやらなければ、仕事に行っても、早く帰ってやらねばと、気にかかってしょうがない。そういう気持ちを爺ちゃんに打ち明けたら「連れていっただら」とあっさり。それはそっだと、それから、連れていける場所は、どこへでも連れていき、目の中に入れたいほどに溺愛し、気がつけば、とんでもない親ばかになってしまっていた。

生活の中に「一匹が増えたこと」で、一人暮らしだけでは味わえなかった喜怒哀楽、特に笑いが増えた。

一緒に寝始めた時、目覚まし時計の鳴るころ、ちよつとその時刻のすぐ前に、舐めて起こすという「こと」をじだした。犬に時間がかかるのか。その行為は、私が休みの日でも行われ、ゆっくり寝たい私は懇願した。「お願いやし、休みの日は起こさんといて」と。その後も数回起こすようなことはあったが、シッコなどの差し迫ったものがない限り知らんぷりをするようになった。なかなか賢い。

また、最初は一緒に起きていたが、早朝ではかわいそうだと「凧はまだ寝てたらええで」というコトバに反応してか、だんだんと遅寝をきめこむようになった。シッコをしたい時は「一緒に起き、用が済むと、すた」とらと寝室をめざす。ついていいたらベッドを見、私を見る。上げて欲しいようだ。抱いてベッドに乗せてやると、長い鼻先で布団をめくり、中にもぐりこんで行く。嘩然。

犬の耳はニンゲンの数倍良いはずだ。ある日、私が目覚まし時計よりも先に起き、うっかり解除を忘れていたことがあった。台所

まで聞こえてくる時計の音に気がつき、止めに行つた。凧太郎は、目覚まし時計二個がリンリン、ブーブーと鳴り響いている音に動ずることなく、まるで、何も聞こえていないかのように布団の中で寝ていた。またもや啞然。

「こんなこともあった。庭の日溜りで、お腹を出して安心しきって寝ている。その姿を見ると微笑ましくもあるが、「あんた、野生はないの？ そんな格好で寝ていてええのん？」と問うたこともあった。いくら庭とはいえ、カラスも猿も、へびもやってくる。

凧太郎はボール遊びが好きだ。取れるものなら取ってみろ、と言わんばかりに、サッカー選手さながら、前足二本をボールの上に乗せ、「こちらを見る。近づくと啞えて逃げる。追いかけてこをしたのはわかるが、逃げ回る彼を私はつかまえられない。「取って来い」「出せ」を教えねばと思つ今日このごろ。ストーブの前でよく寝ている。炬燵の中でもよく寝る。熱く熱くなつてから、涼しいところに移り、ドテーっと長く寝そべり、カラダを冷やしている。限度というものがわからないのか。こればかりは毎冬、毎日繰り返している。学習能力がないのかとも思うが、よく考えたら、炬燵でうたた寝をしてしまった私も同じようなことをしている。似たもの親子か。

私が話し掛けると、大きな耳の根元を浮かせたり、首をかしげたりする。その仕草は、何度見てもかわいらしく、何度見ても飽きることがなく、その度に微笑まずにはいられない。

ある時、カーテンを開けようとしたら、何かが突然上から降ってきた。ぬるっと濡れたようなものの感触が手にとまった。突然のことなので「キャーッ」と叫び声をあげた。すると凧太郎がすぐさま駆けつけ、果敢に吠えたててくれた時があり、とても胸が熱くなった。落ちてきたのはアマガエルだった。

わかってしまえば何も恐くないのだが、まさか家の中にアマガエルがいて、それが上から降ってくるとは予想もしない。凧太郎の行動も予想していなかった。「守りに来てくれたのか」と感激した。

また、いろいろな鳴き声を出すのも面白い。一人前にモンクもたれる。ニンゲンと「緒で「うーうー」と言つ。唸るといふ感じではなくニンゲンが欲求不満の時に出しそうな「うー」。かわいらしいクーンや哀しそうなクーン。えらそうなワンワン。

えらそうに吠えるのは「散歩いこ」と言つておきながら、出かける時に「まどつていたりする時。「はよせえ」と言われているような気がして、あまり良い気がしない。いろんな鳴き方で、意思を伝えようとしているのだろうが、母にはまだあまりわかっていない。すまない凧太郎。

凧太郎は目でもモノを言つ。何を訴えているのかはわからないが、上目遣い、ジト目、淋しそうに見える目、怒っているようにさえ見える目。「こちらが推し量つて、そのように見えるだけかもしれないが、きっと感情豊かだと思つ。

凧太郎のおかげで、「近所の犬とも知り合ひ、その飼い主さんとも親しく言葉を交わすようになった。そして、桃ちゃんのお母さんと知り合うことができた。桃ちゃんのお母さんからは里山のこと、料理のことなど、いろいろなことを教えてもらひ、物心面面で応援してもらっている。桃ちゃんのお母さんの料理はとにかく美味しい。お正月の御節料理も毎年いただくようになった。お蔭で、今年には疲れた体は癒され、食っちゃ寝ができ、二キロ減った体重も元に戻った。凧太郎ともども、とても甘えさせてもらっている。感謝。

そして、爺ちゃん。胃切除後からずっと按摩でお世話になり、そのころ痛めていたコ

コ口を治す応援もしてもらった。凧太郎を授けてもらい、育児やしつけでも助言を請い、何かあったら相談にのってもらっている。今も、月に一度はお邪魔し、家族のみささんに凧太郎を預け、その間、私は按摩で体のメンテナンス。爺ちゃん一家に感謝。

太陽の下で、日向ぼっこをしながら一匹は庭で遊び、一人はのんびりと草抜き。そういう時間が私は大好きだ。これからも、ゆっくり、のんびり、のびのびという時間を生活の中に作り、暮らしていきたいと思っている。

最後に、一人暮らしだけでは味わえない、笑いや潤いを提供し続けてくれる凧太郎にも感謝して筆を置こう。

39 登場人物「一な」



「マロンパパ」



「ベル」火をふくぞ



「ティア」おやめなさいよ



美人のマロン姉さん



「パパ」マウンティングをしかけて負けた



「爺ちゃん」庭で遊ぶ我輩



桃ちゃんちのタロー兄ちゃん。よく一緒に散歩にいきます。



大好きな桃ちゃん



ボクらは仲良し



#### 40. 我輩のコーナー

我輩がかあちゃんのところに来て来た日



写真のピンぼけ、お見苦しきはお許しを



大きな顔に大きな口、パパワン似なんです。まだ火は噴けません。





長い尻尾です



時々オンナノコに間違えられます



短い足とテカイ顔、そのまま大きくなりました。



二ヶ月と少しの暑い日、このあとボクは落ちました



とれるかならてってみろい!!



かあちゃんがドッチボールをくれた



カマキリと対決



歌舞伎役者の隈取りとは「目のまわりのくま」